

## マルクスはリカードを真に超えることが出来たのか

—内在本質としての価値とその実在的形態としての生産価格—

櫻井 毅<sup>a</sup>

### はじめに

しばらくこの研究会をやっていないのですが、新型コロナの蔓延状況もやや下火になってきたので、久しぶりに対面でやってみようかということになったものの、そのうちにまた感染が激しくなってきたので、研究会はやるにしても、前回同様、ZOOM方式でやるということになりました。ただやることは決めたものの、テーマは特に考えていなかったのです。なにしろ最近、私の緑内障は末期的の症状を呈していて、文献などほとんど読めない状況になってしまいました。それで文献もなしで昔の記憶に頼りながら、今までやってきたことの中で、少し考えを延長しているところを、昔ばなしでも加えながらお話でもして、皆さんのご批判を仰ぐ最後の機会にしたいと考えて、上記のような表題を選びました。

テーマはやや刺激的なこんな題にしたのですけれども、マルクスがリカードの経済学を徹底的に研究した結果として、その難点を克服しリカードの経済学を超えたことはもちろん明らかなのですが、問題はマルクスがその生産価格論でリカードの価値修正論を本当に完全に超え切っているかどうかということなんです。つまり、マルクスの生産価格論についての理論的革命があまりに大きかったために、実はまだちょっとその前の尻尾を残しているのに十分対処できなかったという話をしたいということなのです。そして現行の『資本論』第三部に残っていると考えられるその尻尾は、宇野先生の『経済原論』をいわば先駆者としてそれに続く検討・研究の継続と徹底によって、取り除かれてすっきりした状態になってゆく方向が明らかになってきていたのではないか、ということ、ここで論じておきたいというわけです。

そのことは、当然、労働価値説の問題に関わりがあるものですから、話の導入として、最近、日本でも少し話題になっているエレナ・ルーザー・ランゲというドイツの女性の経済学者、というか哲学者、社会思想史家、それから経済学者、といってもその方法論の専門家ですね。ハンブルグ大学で哲学、日本学を専攻され、現在はチュー

リッヒ大学で日本学の講師を担当しているようです。結構多方面で研究、執筆活動を積極的に行われている方の方ですね。そういう方が日本の宇野弘蔵氏の理論体系、いわゆる宇野理論を全面的な研究対象として取り上げて批判を加え、600ページに及ぼうという大著にして刊行したわけですが、その本を話題にすることで話を始めることにしたいと思いました。彼女が批判しているところをちょうど反対に、僕が積極的にその宇野説を支持し、さらにその方向を延長するという対称的な形になりそうだからです。

ランゲさんはここでは主として日本人の研究成果を用いて、もちろんそれだけでなくその欧米での影響をも踏まえて、それらを読み込んで参照した上で、宇野理論を研究した女性であるんですが、去年夏前頃でしたかね、先に言ったように、600ページに近い分厚い立派な本をオランダで出版して話題になったんです。英文で書かれています。詳細な注釈や日本語のものを含めたおびただしい文献目録などが巻末に収められています。僕はその本の一部分のコピーはわりに早くから手に入れていたのですが、実物は持っていません。ただ東京経済大学の学長室の書棚にあったのを学長の岡本英男さんに見せていただいたことはあります。立派な本でした。岡本さんは以前ランゲさんが来日した際に研究会などでお会いしたことがあるそうです。

その本の情報を、去年の夏ごろだったか、専門は全く違うのですが、外国の文献に詳しい私の息子から偶然耳にした私は、その本の一部を早速コピーしてもらって、少しパラパラ眺めてみたんです。

もっとも、そのコピーは途中までで、全部持っているわけではありません。もちろん日本でもその本は買えるんですけど、3万5000円だっていうからもちろん買わない。去年は3万円と聞いていたのですが、円安で値段が上がってしまったんですね。もっと上がるかもしれない。でも今、僕は自分の蔵書を嫌々処分している真最中ですからね、新しい本を買ったりはしません。

a 武蔵大学経済学部 名誉教授

ランゲさんの本の話になってしまったので、これから報告の本題の第1章に入ることになります。

## 第1章 ランゲの宇野理論批判

ランゲさん (Ms.Lange,Elena Louisa) の本はお配りしたレジュメにも書きましたが、正式な書名は *Value without Fetish—UNO KOZO's Theory of 'Pure Capitalism' in Light of MARX's Critique of Political Economy* (Leiden and Boston, BRILL 2021) 『物神性論なき価値論——マルクスの経済学批判の観点から見た宇野弘蔵の純粋資本主義の理論』というものです。この本の中には彼女の宇野理論批判のすべてが入っているようです。あとからさらにコピーを追加してもらった部分も多少あるのですが、もちろん、僕はコピーで全部持っているわけではないし、当然、全部に目を通してはいません。正直、目がよく見えなくなったことを理由にするわけではありませんが、一部コピーしたところを読み飛ばしたところまで行っていません。91歳にもなると熱意も根気もなくなってくるんです。

そのため簡単にその構成でも説明しようと思ったのですが出来ないで、一応、目次だけ掲げておくことにします。煩雑になりますが、部と篇のタイトルおよび著者の表記法による章と節の分けとそれらにつけられたタイトルです。

### 第一部 経済学批判の方法

- 第1篇 序説 方法としてのマルクスの物神性批判
  - 1・1 物神性批判と宇野の「純粋資本主義」の理論
  - 1・2 古典経済学のアポリア
  - 1・3 マルクスの労働価値説の批判的機能 現代の価値形態論議における「形態」についての若干の読解に対して
- 第2篇 資本主義について「純粋」とは何のことか、宇野三段階論の方法と経済学原理論
  - 2・1 三段階論の方法の限界 (三段階論)
  - 2・2 純粋理論のX軸：人口法則
  - 2・3 純粋理論のY軸：労働力の商品化

### 第二部 経済学批判の目的

- 第3篇 宇野の価値理論—物神性論なき価値論 (1947—69)
  - 3・1 宇野の価値理論における抽象的労働の問題
  - 3・2 宇野の価値理論：方法的個人主義と使用価値の物神性
  - 3・3 宇野の貨幣理論：ベイリーの前提
  - 3・4 宇野の資本理論：純粋な形態としての  $W-G-W'$

### 第4篇 マルクスの経済学批判の観点から見た経済学原論 (1952 / 1964)

- 4・1 資本論の再構成
- 4・2 全般的社会的均衡の法則としての価値法則 (宇野)
- 4・3 剰余価値と利潤：宇野の観点からする「転形問題」
- 4・4 恐慌の法則としての価値法則 (マルクス)
- 第5篇 日本における宇野の遺産とその先行き
  - 5・1 貨幣 vs. 価値？ポスト宇野派の価値理論の「貨幣論的研究方法」
  - 5・2 英語圏における宇野派にみられる資本の弁明としての資本の弁証法
  - 5・3 実体の包摂という意味なのか、あるいは意味の包摂なのか：英語圏における宇野派の修史的傾向

#### 【注釈】

#### 【著者索引】

#### 【事項索引】

以上が本書の目次なのですが、いろいろ面白そうな文字が浮かび上がっていて興味がでてくると思います。しかし、まだその内容を検討することがここでの目的になっているわけではありません。さっきお話ししているように僕自身がまだ十分に読んでいるわけではないし、読んだところだけの感想を述べて全体の印象とするのも、著者に失礼でしょう。実際ランゲさんの観点は複雑で、欧米の未知の文献の利用も多く、簡単に反論できるものばかりではなさそうです。

そういうわけで著者が話題にしている宇野先生の問題提起を扱う関係から、多少はランゲさんの本の内容に触れることもあるかもしれませんが、それも問題の関連を指摘する以上のものではありません。ここでは僕自身の過去の研究過程をも回顧しながら、この報告の表題に沿う形で新しい視点をも加えて、お話をさせていただこうと思うのです。ランゲさんの本については批評に別の機会が必要でしょう。扱う宇野理論の諸論点についてはランゲさんの指摘を俟つまでもなく皆さん十分ご存じのことも多いと思うので、適当に端折りながら、出来るだけ問題点を強く浮かび上がらせるようにしながらお話が出来たらいいな、と考えているところです。

ランゲさんがこの本で扱っているのは宇野理論の多岐にわたる『資本論』における問題点の指摘とその批判に関するものですが、中でも価値論に関するもの、価値論、価値形態論、特に表題にもなっている商品の物神的性格

の把握についての考え方に対する全面的な批判、当然導かれる宇野先生の労働価値説に対する批判、それに「1980年代には影響力のあった宇野派の地位の喪失」に伴い、それに代わって登場してきたという「新宇野学派」が、ドイツのDie Neue MARX-Lektüre（「新しいマルクスの読み方派」）およびフランスの「構造主義」の影響の下に、旧宇野理論自体よりも実質的に後退して、ランゲが「使用価値フェティシズム」と呼んで批判したものにさえ回帰しているというような疑問を投げかけているのです。また方法論としては宇野先生の「経済原則」の均衡論的把握——それは多分「使用価値フェティシズム」に関わるとは思いますが——に対する疑問、再生産表式論の把握をめぐる問題、「転形問題」への理解の限界などの指摘、あるいは「三段階論」における恣意的な形式性の指摘、原理論、段階論、現状分析論三者の関係性の希薄の指摘、また彼女は、併せて、そのUNO's Legacy in Japan and Beyondと題する最後の第5篇では、宇野理論に影響を受けた欧米のマルクス経済学者にも厳しい批判を浴びせています。もちろんそういう批判は随所に出てきますから、とりわけここで指摘することもないかもしれません。「宇野の日本での遺産とその先行き」というわけですから、結局、全編すべてが内外の宇野理論の否定的評価につながっているのではないかと思います。もちろんこれは僕の最終的な意見ではありません。

目次にも見られるように、本書は第1部、第2部に分かれています。「経済学批判の方法」という第1部に続いて、「経済学批判の目的」が第2部の表題です。宇野理論を肯定する者、あるいはそれを否定する者と、外国でも宇野理論を扱った文献はずいぶん多くなっているのですが、この本のように、網羅的に全編、宇野理論を扱って、徹底的に批判的な内容を持つと考えられるこんなに大きな著作は今まで見たことがありません。そういう意味では興味を惹きます。今の日本人の経済学者がほとんど見向きもせず理解されなくなっている貴重な業績を、ここまで外国人が研究してくれるのだから頭が下がります。

彼女は、実は以前にも、10年ぐらい前ですが、宇野価値形態論の批判論文を書いたことがあるんです。スイスのチューリッヒ大学のアジア・オリент研究所の研究職で、今でもそこで講師でいるかと思うんですが、大学の雑誌、一種の「紀要」ですかね、*Zurich Open Repository and Archive*という雑誌に寄稿した論文なんです。

これは宇野さんの価値形態論を批判した論文で、Failed Abstraction—The Problem of UNO KOZO's

Reading of MARX's Theory of the Value Form, なる表題を持つこの論考は、価値形態論で商品の所有者を宇野さんが登場させているけど、それは間違いだ。大体、労働価値説を前提しないのがおかしい、というわけで、戦後、日本の錚々たるマルクス経済学者を集めて行われ雑誌『評論』に連載された『資本論』の研究会で、価値形態論の理解のために提示されたその宇野説に当時対峙した久留間鮫造説によく似ています。それが彼女の宇野説批判の出発点じゃなかったのかな。

先に言ったように、今度の本ではいろいろ書いていますが、最後の方で、主としてヨーロッパの宇野理論の信奉者たちに対する批判をまとめたところがあります。ドイツ人の宇野理論理解とか、それに英語圏の宇野理論ですか。そういうものの消息を伝えていて、それはそれで面白そうなんですけど、こちらは正直、ヨーロッパの現在の思想状況の知識が無いから理解が難しい。

余談になりますが、たまたまこの本の所在を息子から知らされて、先に言ったように私は息子に頼んで部分的にコピーしてもらったのですが、当時からすでに自由にコピーが可能な状況だったのでしょうかね。先ほどどなたからかご指摘があったように、ですね。

ところで今年の正月に、永谷清さん（元筑波大学、前信州大学・教授）から頂いた年賀状に、ヨーロッパで宇野理論を扱ったすごい本が出てると書いてあったので、電話をかけてランゲの本のことですかと聞くと、そうだとされたので少しその話を聞きました。永谷さんはそのうちその本のことをどこかで報告したいというような話をしていました。今年1月に惜しくも亡くなられた関根友彦さん——長らくカナダのヨーク大学の教授をされていて、英語圏での宇野理論の研究の拠点を形作っていた人です——が、晩年、帰国されてから、東京経済大学内で主催されていた「杉並研究会」で報告すると言われていて、その後報告のレジュメを頂いたような記憶があります。しかし、その報告は実現せず他のテーマのものに代わったように聞いています。実際は、どうだったのでしょうか。永谷さんはランゲの本にはあまり新鮮味がないと言われていたように記憶していますが、熱心な永谷さんのことですから、必ず論文を書くと思います。ランゲさんご自身は西田幾太郎の研究で学位を取った人だという話をうわさで聞いていますが、確かめたわけではありません。日本留学も何度か経験しているようです。以前、「杉並研究会」で一度英語で報告したことがあるとも聞きました。経済学者といわれたとしても、論理の進め方は哲学的で、社会思想研究者と呼ぶのが適切なのかもしれません。マルクス主義の思想関係、社会問題関係の出版物があるようですね。ともあれ、僕も緑

内障の悪化で目がとても悪くなって本が早く読めないどころか、実際に、しっかりと正確に読めない恐れもあるのですよ。だからよく分からないで間違っただけで、部分的に読んで全体の意味を取り違えたりする危険性もあるので注意する必要がありますからね。ランゲさんの本についてあんまりお話しはできません。

そういうわけで折角のランゲさんの本にバイアスが先に大分かかってしまったかもしれませんが、その本にはちょっと覗いただけでも結構いろんなことが書いてあって面白そうなのは確かです。とても僕自身には時間は残っていないのですが、でも細かく読んでみたいという気持ちだけはあります。

つい余計なところに話が行ってしまったので、報告をまた価値論の方に戻しますが、話は根本的には表題にあるマルクスによる「商品の物神性」の解明の重要性を、それを無視するとする宇野に対して鋭く批判しながら、改めて主張するということになるようです。そのため議論は『資本論』冒頭の価値論についての宇野批判から実質的に始まっているのです。表題の *Value without Fetish* (『物神性論なき価値論』) から予想されるように、実際に宇野先生の『経済原論』、古いのもそうですが新しい『原論』でも、要するに『経済原論』の最初の部分は、労働価値論の実体を欠く流通形態論になっているという批判です。宇野『原論』には『資本論』第一部の冒頭に見られるような二商品を等置し両者の使用価値を捨象して残る投下労働量で労働価値説を説くという形はみられない、というわけです。はじめに流通形態だけを説くという宇野『原論』の特徴は確かに捉えられています。Doctrine of Circulation という言い方は、多分、関根友彦さんの宇野『原論』の [流通論] の翻訳語をランゲさんがそのまま使っているんでしょうね。生産論は Doctrine of Production そして分配論は Doctrine of Distribution という具合に、全部 doctrine。関根さんは宇野『原論』を翻訳するとき、その英訳の草稿を書き上げると少しづつ宇野先生や私たちにも定期的に送ってくれたんです。意見があれば言ってくれ、と。そういうこともあって、これはあまり主張の独自性が強調されすぎて、この本に含まれる教科書的性格からいっても、訳語として適当ではないんじゃないかって、渡辺寛さんと一緒になって、僕はカナダのヨーク大学にいた関根さんには随分しつこく手紙でいいましたけれども、関根さんの方がもちろん語学がずっとできる人だから、彼はその申し出を拒否したんですね。

その話とはともかく、ランゲの本では、その Doctrine of Circulation, その流通論というものが『原論』全体系

の一番最初の部分に来ているんだってということがはじめに批判的に紹介されています。何故批判的か、というと、商品経済で一番大事なのはそれがもっとも基礎的な概念で、商品経済なんだからそれは商品を規定している社会的抽象的な人間労働、つまり労働価値説の問題なんだけれども、それが『資本論』ではトップに来ている。それなのにそれが宇野『原論』では抜けていて、冒頭に流通形態論なるものが来ている。ランゲさんには、それは全く間違いだということなんです。労働について宇野はそこでは一言も論じてないが、経済学っていうのは、product and production が主題の筈なのに、そのことに全然触れてない、そう言ってランゲさんは怒るわけです。

ランゲさんは実は別なところで、「宇野は『資本主義』や『資本主義的生産関係』という言葉よりも、『商品経済』という言葉で「無条件に中心的に用いている」。そこにこそマルクスと宇野の違いがある。マルクスが社会関係としての労働の役割を重要視しているのに対して、宇野は商品経済の運動法則によってその社会が機能していることに力点を置いているところに違いがあるというわけです。そしてその理由を宇野は『商品とその形態が資本主義経済の主要な特徴だから』としている」、とランゲは指摘し、商品を単に流通形態として扱うのではなく、現に「我々の現在の経済生活は商品経済の形態をとっており、より正確には、資本主義的経済の形態をとっている」ではないかと宇野批判をおこなっています。そして同時に、宇野先生の「経済原則」という考えを、安定的な経済構造の実在を示すものと多分錯覚してしまって、資本主義の矛盾が商品の分析の中に詰まっていると言いたいでしょう。

しかもランゲさんによれば、宇野は、商品の物神性には一顧だにしていない。商品の形態だけで労働の実体は前提せずに議論しなきゃいけないっていうことを宇野が言ってるんだってことも紹介してしまっていて、それも特に物神性論がない、労働価値説もない、ということで、ランゲさんは厳しく宇野先生の商品論を批判しているんです。

物神性について宇野先生が知らないわけがない。ただ先生はそれを商品物神より貨幣物神として、あるいは資本主義社会の物神的性格として、より拡大してその特徴を強調されているのだと思います。その話は最後にもう一度問題にしたいと思います。

僕は先にも断ったように、この本の一部だけをパッとしか読んでないんで、もちろんノートなんか取っていないもんですから、記憶だけに頼って言っているんですけど、宇野理論っていうのは、1980年代に人気を失ってしまったというふうにとっさに書いてありました。「宇

野理論の日本での遺産とその先行き」という最終篇でしたかね。現在では、日本では「新宇野派」っていうグループが形成されていて、それは原宇野理論よりもっと駄目だと批評されています。その代表的な人名も6人ほどだったか挙げてありましたが、ここで挙げることもないでしょう。日本でいわゆる宇野理論の系譜に属すると思われる人は含まれていません。ただそういう人たちがグループとして活躍したことは過去にも現在でもなかったように思います。先に彼女の挙げている新宇野派と目される人々の論文なども、著者のランゲさんは、全部読んでいるみたいですね。僕の方はほとんど読んでいないから、その話はこれ以上できないという事情もあります。実際、ランゲさんの本はここでは話の糸口に挙げただけで、この報告で対象として扱っているわけではありません。

そういうわけで、このランゲ女史の話では、特に商品の価値の実体である抽象的人間労働の問題が抜け落ちているっていうことが宇野理論の問題点になっているわけで、それから物神性っていう非常に大事な問題を宇野さんが無視しているっていうことが根本的な問題点にされたのです。物神性の問題は私のここでの主題とあまり関係ないので、今日の報告の一番最後に、その問題にもう一度立ち戻って、宇野理論の『経済原論』における、そういう原理論的意味というものを考える中で、物神性論というものについても改めてもう一回立ち戻ってみつもりです。

取りあえずそういうことで、ランゲさんの本には宇野理論の特徴っていうような流通論、流通形態論で価値論のない流通論、労働価値説のない流通論、そこで始まっているんだっていうことで、労働価値説自身も非常に、どういう表現だか忘れちゃったけども、内容の空虚な労働価値説になっているんだってことが書いてあったというふうに思います。ランゲさんの本に関わりすぎて、かえって混乱させてしまって失敗だったかもしれませんが、ごく新しい話題の本だったのでつい寄り道してしまいました。これからは本題そのものに即してお話しをしたいと思います。

## 第2章 マルクスを遡る Grundrisse までの歩み

さて次に、2章目に入りたいと思うのですが、この2番目の章では、レジュメに出ているように、Grundrisse (『経済学批判要綱』)までマルクスを遡ってみようというわけですが、時間があまりなくて詳しくはできませんので、ごく簡単に済ませます。ただ、最初に取り上げるのはGrundrisseよりはるか前の話になります。価格と価値の関係をマルクスは初期の段階ではどう考えて

いたのかっていう話なんです。

ご承知のようにマルクスはボン大学で博士号を取得したのですが、大学教授への道は閉ざされていて、結局、『ライン新聞』の編集の仕事をするようになり、社会問題への関心から、その問題の理解のためには経済学を学ばなければならないと考えて、自ら経済学の学習に励むことになったことは、ここで説明する必要も無いことでしょう。

ここではその初期に出会った若きエンゲルスの『国民経済学批判大綱』(1844)の話から始めましょう。詳しいことは省きますが、エンゲルスが『独仏年誌』にこの論文を書いたのは24歳のときで、二人が初めて会い生涯の友となる1年前のことでした。その論文は短いものですが、資本主義の矛盾という問題を、初歩的にせよ「経済学批判」と銘打って理論的に指摘したという点で、さらにマルクスに多大の影響を与えたという意味でも、マルクス主義の先駆的な業績といってもよいと思います。そこでエンゲルスが何を言っていたかという問題ですが、歴史的に商業から発達した資本主義が搾取を完成させた社会であり、それ自身の社会的性格によって崩壊するという見通しは明確であり、その社会内部の対立を前提として国民経済学を批判し、本来の人間的な経済学の確立を目指そうという社会主義的な意図もはっきりしているんです。社会主義的観点から古典経済学に対するカテゴリー批判を成し遂げる契機となる著作だとすれば、完成度は低いといっても、その意義は大きいと言わなくてはなりません。

そういう中でここで取り上げたいのは価値(生産費)と交換価値(価格)との関係です。エンゲルスは交換されない商品に価値はないし価格は市場の競争によって決まるとするわけです。いくら生産に費用が投ぜられても、売れなければ何の価値もないということですね。エンゲルスは労働価値説を採っているわけではありません。ただマルクスとエンゲルスにとっては、本質の顛倒として現れる現実の価格こそが問題であったのです。現実の価格を価値(労働価値説)に追い詰めてゆくりカードの価値修正論とは真逆です。資本主義を絶対視するリカードなどの国民経済学(古典派)と社会主義者のエンゲルスの着眼の違いが理解されなければならない点ですね。

後年、マルクスはしばしばこの若きエンゲルスの論文に言及して高く評価しています。1859年に刊行された『経済学批判』の「序言」の中での「経済学的カテゴリー批判のためのエンゲルスの天才的な小論」(Marx=Engels Werke, Bd. 33, S. 10, 訳7頁)というマルクスの評言は有名です。また、例えば次の手紙—労働時間による生産の規制が「諸商品の価格の運動によって実現される間は、

相変わらず、君が『独仙年誌』の中に適切に述べたとおりだ』(Ibid. Werke, Bd. 32, S. 12, 訳11頁、一部省略)など、マルクスが強く印象付けられたものであることが想像できます。

時間がないので *Grundrisse* に入りましょう。 *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* は『経済学批判要綱』とも呼びならわされている草稿のことなので、略して日本では『要綱』とも呼びます。これはマルクスが経済学批判の体系として書き始めた最初のまとまった原稿です。マルクスはその前から様々な経済学体系のプランを考案し、それをいろいろなところに書き残していますが、そのプランの中で言えば、この草稿はプランの中の中項目の「資本一般」に該当するというのが一般的な見方であると思われます。1857年から58年に書かれたものといわれています。

マルクスの経済学批判体系の執筆において、一応にせよ、そこからまとまった著作として出版されたのは『経済学批判』(1859)と『資本論』とくに第一部(第二部と第三部はマルクスの草稿をエンゲルスが編集して出版したもの)だけですから、マルクスにとっては『要綱』はその体系プランのごく一部ということになるのでしょうが、『資本論』を一応完結した著作と考えれば、『要綱』も『資本論』に至る過程の準備過程の草稿としての意義も大いにあるわけで、ここでは本来「資本一般」の範囲外に属するはずの『資本論』第三部で展開される生産価格論に関連する問題が多少とも触れられてある限りで、『要綱』の果たした役割を扱おうとするにすぎないことに注意しておいてください。

エンゲルスがマルクスの死後、マルクスの遺した草稿、とりわけ古い未完成の部分の多い第三部の原稿を大変な努力で編集して出版した経緯を考えれば、そこに多くの未解決の問題が潜むだろうということが当然予想されるわけですが、実際、例えば、今流行の人齋藤幸平さんなどは、エンゲルスは晩年のマルクスの物質代謝崩壊論の認識にまったく気づかなかったとして非難するだけでなく、さらにまた『資本論』第二部、第三部の編集の不備をやたらにあげつらうなどして、エンゲルスを非難するのですが、そしてそのことについては去年この研究会でも齋藤幸平氏の『人新世の《資本論》』の報告をしたときに取り上げたことがあったかと思いますが、僕自身は、その時にも言ったかと思うのですが、『資本論』で示される理論の整理に関しては、当時のエンゲルスの営為に驚嘆するわけですが、また同時に、そこになお残る不十分な箇所があったとしても、いたずらにエンゲルス個人に責任を帰するのではなく、その後の研究の成果を生かしつつ、さらなる論理的完成への努力を、我々自身

の責任をも含めて進めていかななくてはならないと痛感するのです。当然、これがマルクスやエンゲルスの個人的な思想の問題ではなくて科学的な客観的な論理の問題だと考えているわけだからです。ただマルクスやエンゲルスの責任というより理論の完成度の問題として、その論理の追求はその後の研究に委ねられていると思うからなんです。対象が社会科学だと考えているからです。

*Grundrisse* に戻りますが、マルクスの経済学のプラン問題をめぐる議論の中にはいろいろな主張や解釈があって、一筋縄ではいかないんですが、僕は *Grundrisse* は「資本一般」とマルクスが名付けた領域に整理できると思います。プラン問題の議論に入ると大変なので、詳しくは触れませんが、僕の記憶では、佐藤金三郎氏を囲むシンポジウムとして事実上の佐藤氏の遺作ともなった、高須賀義博氏が編者になっている『シンポジウム《資本論》成立史』(1989)あたりまでですかね、新しい資料の公開は進んできて、プラン問題自身の新しい展開はあまり論じられていないような気がしていますが、僕がそっちの方をあんまり勉強していなかったからかもしれません。

ただ『要綱』の「資本一般」としての意義があまりにも明確で、その後の『資本論』形成史の研究に与える影響があまりにも大きかったからだともいえます。この『要綱』の与えた影響は実際大きかったようです。ソ連では最初はロシア語版で出版したと言われてます。いつものソ連のやり方ではありましたが、少なくとも世界の研究者を対象にしたものとは思われません。間もなく本来のドイツ語版が出て研究者の間で大騒ぎになりました。宇野先生は最初の日本での売り出しの時買い損ね、二度目の売り出しを知った時には、本郷から神田の極東書店までタクシーで駆けつけたという逸話も残っています。先生は、大きくてとても分厚い本で両手でないと持てないのですぐたびれるから、夜寝るときに読むのに読み過ぎないで丁度良いと言われていましたが、宇野先生の熱中ぶりは大変なもので、折々の言葉の表現の中にまで影響されていた印象があったような気がします。voraussetzenなんていう言葉がゼミでも飛び交いましたね。岩田弘さんもとても熱心に読んでいました。丁度僕が大学院の宇野ゼミの修士課程の学生の頃でしたから当時の印象は鮮明です。ただ修士課程の院生としては修士論文のことで頭がいっぱいで、*Grundrisse* にまではとても手が回らない。自分ではごくわずか関心のある箇所を拾い読みした程度で、本格的に読んだのは、正直、高木幸二郎さんの訳本が出てからですね。話が飛び過ぎましたが、とにかく読めば読むほど考えさせられることの多い本であったことに間違いありません。

簡単に言えば、マルクスの経済学プランは一般、特殊、個別という一般的構造を持っているんですが、その中で、一番標準的なものとして知られるプランがあって、それをまず説明しておきましょう。これは1857年11月ごろの執筆と言われるものです。

## I 資本

### a 資本一般

- |       |        |
|-------|--------|
| 1) 商品 | ] (序説) |
| 2) 貨幣 |        |
| 3) 資本 |        |

- ① 資本の生産過程
- ② 資本の流通過程
- ③ 両者の統一または資本と利潤、利子

### b 競争

### c 信用

### d 株式資本

## II 土地所有

## III 賃労働

## IV 国家

## V 外国貿易

## VI 世界市場 (と恐慌)

いままで僕が「資本一般」とっていたのは、この表で言えば、Iのa「資本一般」の箇所を想定しています。現行の『資本論』全三部の構成と似ているところと違っているところがあることは気付かれる通りです。「資本一般」として説かれている限り、個々の資本が登場することはありません。例示されてある資本は資本の一般性を代表する資本として代表単数的に登場しているだけです。その限りですべての資本に共通する性格が語られるわけです。『資本論』の場合でも、第一部、第二部では最初の商品論、貨幣論などの部分を除けば、方法は共通していると言えるでしょう。第二部の第3編では第一部門と第二部門の資本が登場しますが、それも「一般」の範囲内と考えていいでしょう。それに対して『資本論』の第三部はいわば、諸資本の競争論で始まるのですが、それは「個別資本」の市場における競争であり、「資本一般」の方法には適合しないと思われます。ここに興味ある問題が潜むわけです。

なお、このプランの下敷きになっているのはリカードの『経済学原理』の体系でないかと考えている人は少なくありません。

マルクスはこの『要綱』の執筆に続いて『経済学批判』(1859)を出版するのですが、『要綱』では「資本一般」の出発点を「労働」または「生産」というような「一般

的抽象的諸規定」に置く考えを残していたと思われます。しかし『経済学批判』では明らかに冒頭の分析は「商品」におかれていたわけで、マルクスが形態規定を重視する方向に舵を切ったことが明瞭になります。そしてそのあと、いわゆる「23冊ノート」(1861~63)とも呼ばれる次の新しい「経済学批判」草稿(1861~63)の執筆を始めます。しかし興味深いことに、旧来の経済学を批判する「経済学批判」として草稿を執筆していたマルクスは、その「剰余価値学説」研究を主題にした「23冊ノート」原稿の執筆の途中で、それまでの剰余価値を中心に検討していた研究の領域の中に、新しい問題、つまり市場における競争の結果としての利潤率の均等化を通じて形成される生産価格(当時はまだ生産価格という名称は用いず費用価格とか生産費などと呼んでいました)の概念を、ロートバルトゥスの地代論の検討を通して初めて確立することになったのです。これは従来の「経済学批判」の構想の枠を超えるものだったのでしょうか。マルクスはその時期、友人にあてた手紙などで知られるように、それまで自らの著作に名付けようと考えていた「経済学批判」の名称は副題に移し、本題を『資本』の名称に改めることを決意したのです。

そしてそこからさらにリカードの『経済学原理』を中心にその後の発展を通じた詳細な研究に精力的に取り掛かることになります。その上で当時の通俗的な経済学者の資本理論や利潤論の研究に没頭します。そしてさらに次に、新しく獲得した問題意識をもって改めて書き出した新しい草稿(1863~65)こそが、現行『資本論』の構成に近い、いわば『資本論』の最初の草稿(「直接的生産過程の諸結果」などの原稿を含む)になるということになります。その中に現行『資本論』第三部の原稿部分もあるわけです。しかし第一部や第二部はその後何度か手直しされた原稿が残っており、特に第一部については書籍として初版、再版、あるいはフランス語版として、改訂された版が二度までも刊行さえされているのに、第三部には、この時期の、古くて不完全で論旨も必ずしも一貫するとは言えないような部分を含む原稿しかないのです。こういう状況にあると考えると、当然いろいろな問題が出てくるだろうと予想されるわけです。

話をしているとどんどん長くなって困るのですが、ここで大事な引用をしておきます。こればかりはいい加減な記憶に頼るわけにもいかないので、『資本論』から正確に引用しておきます。

「第一部では、それ自体として見られた資本主義的生産過程が直接的生産過程として示している諸現象が研究されたのであって、この直接的生産過程ではそれにとって外的な諸事情

からの二次的な影響はすべてまだ無視されていたのである。しかし、このような直接的生産過程で資本の生涯は終わるのではない。それは現実の世界では流通過程によって補われるのであって、この流通過程は第二部の研究対象だった。第二部では、ことに第3篇で、社会的再生産過程の媒介としての流通過程の考察にさいして、資本主義的生産過程を全体として見ればそれは生産過程と流通過程の統一だということが明らかになった。この第三部で行なわれることは、この統一について一般的な反省を試みることではありえない。そこでなされなければならないのは、むしろ、全体としてみた資本の運動過程から出てくる具体的な諸形態を見いだして叙述することである。現実運動している諸資本は具体的な諸形態で相対しているのだから、この具体的な形態にとっては直接的生産過程にある資本の姿も流通過程にある資本の姿もただ特殊な諸契機として現われるにすぎないのである。だから、われわれがこの第三部で展開するような資本のいろいろな姿は、社会の表面でいろいろな資本の相互作用としての競争のなかに現われ生産当事者自身の日常の意識に現われるときの資本の形態に、一步ごとに近づいて行くのである」(Marx=Engels *Werke*, Bd. 25-1, 邦訳『資本論』Ⅲ a, 33~34頁)。

注意深く読むと、これが例えば、「直接的生産過程」というような古い言い方であるとか、あるいは『資本論』第一部初版の一番最後に述べられている第二部への移行規定と同じく、「資本の流通過程」を生産過程の成果としての商品が投げ返されるべき実現の過程として補足的に扱おうとしている点など、現行の『資本論』第二部の全面的な「資本の流通過程」という理解に対して、『資本論』初版段階の理解を少なくとも表現的にはまだ残していることとの違いに気が付くのではないのでしょうか。でも他方で、この叙述が個別諸資本の競争関係から出発していることを告げる重要な第三部の冒頭の言葉であることにもっと注目するべきでしょう。

マルクスは実は、*Grundrisse*の中で、「この考察は後に多数の資本の考察の際におこなうことであって、まだここでは問題とすべきではない」(邦訳『要綱』Ⅳ, 713頁)といいながら、そのことを先取りして、次のように述べているところがあります。

「生産過程で産出された価値は交換でその価格を実現するのだから、生産物の価格はじっさい、原材料、機械、賃金および支払われない剰余労働のうちに含まれている労働の総量にたいする等価を表現する貨幣額によって規定されているようにみえる。価格はここではだからまだ、ただ価値の形態変化として現れるにすぎない。価値は貨幣で表現されている。だがこの価格の大きさは資本の生産過程で前提されたものであ

る。資本はそれとともに価格を規定するものとして現れ、その結果価格は、資本によってなされる前貸+資本によって生産物のうち実現された剰余労働、によって規定されている。反対に価格が利潤を規定するものとして現れる点については、のちに見るであろう。そしてここで現実の総生産費用が価格を規定するものとして現れるとすれば、のちには価格が生産費用を規定するものとして現れる。競争は、資本の内在的な諸法則を資本にたいし外的な必然性として強制するために、それらの法則を外見上すべてさかさにする。それらを転倒する」(邦訳『要綱』Ⅳ, 714~15頁)。

この*Grundrisse*の原稿よりあとで書かれた「23冊ノート」にも似たような表現があります。これも引用しておきましょう。

「競争のなかでは、資本の、資本主義的生産の、内在的な諸法則は、諸資本相互の機械的な発展の結果として現われる。したがって転倒され、ひっくり返されるのである。成果であるものが原因として現われ、転化した形態が本来の形態として現われる、等々」(邦訳『資本論草稿集8〔経済学批判Ⅴ〕』大月書店, 140頁)。

「資本一般」として説かれる資本の内的で本質的規定は、第三部では、それを受け止めて具体的に展開する個別資本の現実的な姿態で、登場することになるはずで

そうなるかどうか。以上は、『資本論』の第三部の第1篇で示されているような形を通して、本質は逆転して展開されるという道をたどることになるのでしょうか。平均利潤率の形成とか、費用価格の形成など、いわば個別資本が現実を受け止める形態としての具体的な姿態とそれへの展開が論じられることになるでしょう。しかし実際には、生産価格の形成を価値交換から出発して剰余価値の利潤への転化、そしてさらに利潤率の均等化のための再分配として平均利潤の成立を通して展開される第2篇は、どうしても第1篇との関係が問題になってきます。商品の価値での交換という状況を設定して、そこから出発して剰余価値から特殊の利潤率を計算してさらに特殊の利潤率の平均化を導くというやり方です。教科書的に非常に説明が簡単なために、誰でも知っている生産価格の導き方です。でも価値での交換という前提はいかにも不自然です。そういう設定がなぜ必要なのでしょう。

ところで、以前、僕は大内力先生が1958年に東大出版会から出された『地代と土地所有』という本を読んで非常に励まされた経験があります。当時、差額地代論が日高普先生と大内先生を軸として盛んに議論されていま



したが、ここではそのことではなく、大内先生がこの本の中で理論的に商品の等価交換を前提しないという立場を非常に明確に主張されていたことでした。大内先生のような高名な先生が堂々とそういうことを著書の中で主張されているということは、われわれのような若輩にとって非常に有難く力強い援軍の出現にはかなりませんでした。等価交換の否定を言っていたことが自信の裏付けを得たということになったのです。あの本を読んだ時に感じた一種の安堵感は生涯忘れられないものだったといっても過言ではありません。

もちろん生産価格に関する課題は等価交換の前提の問題だけでなく、新しい「転化問題」の登場も従来の理解を超える難問になったのです。日本では三部門分割が問題だという場違いの批判があっただけで、問題自体の把握すら十分ではなかったのです。でも欧米ではスウィージーの問題提起に沿うような形で議論が進んでいました。でもそれを見る限り、数学的な解法には方法論的に無理があるという認識は僕に強くありました。残っていたのは批判するには方法論的な整理が十分ではないという問題でした。僕は価値と生産価格との次元の相異論を主張していたのですが、マルクスの経済学のプラン問題研究家の様々な方法論的な問題の指摘にも関心がありました。もちろん鈴木鴻一郎先生編集の『経済学原理論』（下）の原稿執筆の頃になっての岩田弘さんとの交流の影響も大きいです。僕は彼が懐いていたのと同じ問題をやや違った角度から眺めて解決を考えていたのでした。あとから考えれば彼だけが僕の論文を評価してくれた理由もそこにありました。後に岩田さんが「原理論」の世界資本主義の「内面化」論だということを言い出すようになってから、意見は完全に分かれたのですが、宇野先生の労働＝生産過程論で基本的には労働価値説の問題は解決できるという考えは基本的にはほぼ同じだったのでしょう。岩田さんも、彼の著書『マルクス経済学』上巻（1967）で、あの「労働＝生産過程」による労働価値説の証明の方向性を示したのは宇野さんの功績だと言っていますが、同時に、資本の価値形成増殖過程で、それを繰り返して失敗していると指摘しています。同感ですね。要するに、生産価格の問題が論じられた時期は解決を要するさまざまな難問に行き詰まって試行錯誤を繰り返していた時期でもあったのです。

でもここであまり先に進む前に、リカードの価値修正論に戻ってそれを見ておくことにしましょう。

### 第三章 リカードの価値の修正論およびその影響

リカードの『経済学と課税の原理』の初版は1817年

に出ましたが、価値論の修正を多少でも考えようとした第Ⅲ版が出版されたのは1821年であり、より詳しく本格的に価値修正論について論じた「絶対価値と交換価値」の論文はリカードの死の年（1823）に書かれ、それが遺稿として発見されたのは第二次世界大戦中で、『リカード全集』で初めて公開されたのが戦後のことですから、もちろんマルクスが目にするのはなかったわけですね。マルクスの「23冊ノート」の草稿が書かれたのは1861～63年だから、リカードより大分後の話ですが、マルクスがその草稿執筆の段階で生産価格の概念に到達したのは実はその間の1862年の中頃で、また彼がリカードの研究を本格的に始めたのはさらにその後の話です。いずれにしても、ここでリカードの話に戻ったところで、別に何の支障もないと思います。

実際、本来ロートベルトゥスの発見に関わるものであるとしてマルクスの生産価格論を批判する者は、エンゲルスによれば、マルクスの死後かなりいたようです。だからエンゲルスは『資本論』第二部の「序文」で、第三部の刊行に先立って、マルクスの生産価格論についての問題提起を行っているわけです。リカードにつながるという話は、実は、マルクス経済学にはほとんど出てこないのです。

あとでお話ししますが、僕自身も、大学院の学生の頃、カウツキーの編集したマルクスの「23冊ノート」すなわち『剰余価値学説史』を本来の執筆順に即し改めて編集しなおした新しい版がソ連でまずロシア語で発表されたことがありまして、その目次だけが翻訳されて日本の共産党系の雑誌に発表されたことがあるんです。玉野井先生の示唆もあって、僕はカウツキー版による古い改造社の『マルクス・エンゲルス全集』版の『剰余価値学説史』の内容を新版に即して並び替えて読み直し、ロートベルトゥスの地代論の研究を通してマルクスが新たに絶対地代を見いだしたこと、同時にそれは農業資本の有機的構成が比較的低いことから、そこにその絶対地代成立の根拠を見いだしたことで、生産価格（当時のマルクスの用法では費用価格）の概念を引き出したことを確認し、意気込んで論文を書いたことがあります。しばらく経ってソ連の『資本論』研究家のヴィゴツキーの『資本論の生誕』（1967）という翻訳本が出版されたときに、それを読んだら全く同じような過程を踏んでマルクスが生産価格論を導いたことが研究史的に書いてあって、ほとんど自分の論文と同じ話になっているので、とても驚いたり喜んだりしたことがありました。ロートベルトゥスからんでいるところをみても、問題は先ほどのエンゲルスの当時の問題提起などとも多分重なるものがあると思います。

話がどんどん拡散してしまいますので、元に戻りましょう。リカードの価値修正論です。

リカードの価値修正論はここでは主題に関わる大きな問題ではありませんけれど、色々面倒な話になるので詳しく扱うのはやめにします。関心のある人は僕がその問題について書いた論文がいくつかあるので見てください。むしろ僕にとっては自分が書いた修士論文がまさにそれを扱っていたので、その思い出を交えて少しだけ話をし、簡単に済ませたいと思います。

先ほども触れたと思いますが、リカードが価値修正論をはっきり言い出すのは、最晩年の遺稿「絶対価値と交換価値」（未定稿と完成稿の二種あり）で、『経済学原理』では第Ⅲ版に両義的な表現はありますが、区別は必ずしも明確ではありません。僕が修士論文で扱ったのはリカード『原理』の価値論の初版と第Ⅲ版との比較でした。

リカード『原理』は、僕が高校卒業後、武蔵大学に籍を置かせてもらったまま病気の療養生活に入り、3年後、突然治っているといわれて、それじゃ早く卒業しなくてはと、大学に顔を出したばかりの時に、「外書購読」が必修科目だったことを知り、そこで岡茂男先生について読み始めた最初の経済学の本だったのです。そんな種類の本は今まで読んだことがなかったので興味深く、なかなか進まない授業をよそに、ゴンナー版の古本を買ってきて勝手に一人でどんどん読み進めて、8章ぐらいまでは自分で苦労して読んだかなと記憶しています。小泉信三訳の古くて分厚くしかも分かりにくい文体の岩波文庫が幸い我が家にあって大分重宝しました。そういうわけで比較的親しみがあつたこともあり、大学院に入った時、Sraffaの編集した『Ricardo全集』が原語ではほぼ出そろっていて、第1巻のSraffaのintroductionが極めて興味深かったこともあり、『原理』第Ⅲ版の収録されたその巻に併せて載っていた初版の第1章の価値論部分と第Ⅲ版の第1章との比較を試みたんです。今でもそうですが、リカードの『原理』はほとんど第Ⅲ版しか読まれていませんでしたが、初版は、特に価値論は内容が第Ⅲ版と随分違うのです。初版の研究というのは英語でも日本語でも目にしたことがなかったこともあり、自分で選んだのです。初版では、価値の修正というのは賃金の騰落が固定、流動の資本構成の違いや「耐久性」と名付ける資本の回転期間の相違によって価値の変動に与える影響の違いを主題にしています。マルクスが生産価格論を説いた後で、いわば系論として取り上げている問題です。リカードが『原理』初版の原稿を書き進めているときに逢着した「奇妙な効果」という難問がそれでした。それはこういうことです。

リカードは固定資本とか流動資本の割合、あるいは資

本の耐久性などという言葉を用いていますが、わかり易くマルクスの表現で言い換えれば、資本の有機的構成、あるいは資本の回転期間の相違、によって賃金騰落の影響が異なるということで、極端な場合、価値を尺度するのに金を用いるとしたケースでは、金生産を例えば有機的構成を最低のところに置けば、それで尺度されるすべての生産物の価値は、賃金の下落とともに上昇し、逆に、その上昇とともに下落するという結論がもたらされるという問題です。この「奇妙な効果」はアダム・スミス以来の旧来の経済学の常識を逆転させるものでした。

ここから出てくる興味ある論点は、商品の価値を貨幣量で算出しているところです。実は、「転形問題」で登場してくるリカード学派のBortkiewiczのマルクス批判のヒントがすでにここにあったのではないかというのが僕の着眼点ではあったのですが、とりあえずここでは素通りして、あとで触れます。

さて、リカードは『原理』第Ⅲ版では第1章の価値論の後半を大幅に書き換えています。基本的にはリカードは労働価値説の修正を、まだ賃金の騰落との関係に置いているのですが、知らず知らずに、賃金騰落と関係なく資本構成や回転期間の相違によって投下労働量による価値規定が修正されなければならないと感じ始めています。固定資本の償却期間の相違であるとか、回転期間の相違による利潤率への影響などからです。資本構成の相異ももちろん念頭にあります。ただそれはあくまでも賃金騰落の影響の問題として提起されています。ただ賃金の騰落の問題であることを忘れてしまっているところもあります。考えが曖昧になっています。リカード自身は最晩年にこの問題を取り上げますが、その時は「不変の価値尺度」の探求として、事実上、価値そのものの修正を主題にします。それにしてもリカードの価値論の修正における曖昧さが、すでにRamsayの*An Essay on the Distribution of Wealth* (1836)の中で鋭く指摘されていることはかなり興味深いことです。Ramsayはリカードの遺稿までは見ていないからです。

また、マルクスへの「橋渡し」という意味では、リカード以後のその学派の貢献も、考えられないわけではありません。有名なJ.S.Millの父親でBenthamとともに功利主義の理論家かつその思想的活動家として名高いJames Millは、すでにリカードの本格的な価値修正論を承知していて、その解説を、リカード自身では、未発表の遺稿以外には明示的にその『原理』Ⅲ版でも明らかになっていなかった本来的価値修正論を、いわばリカードに代わってその著書*Elements of Political Economy*, 3rd ed. (1826)の中で一般的に論じていることが注目に値します。ただ先に触れた第二次大戦中のリカードの

遺稿「絶対価値と交換価値」の発見が、リカード=J.ミルの束になった往復書簡の発見に伴うものであったことを合わせ考えると、J.ミルがすでにリカードの遺稿に目を通していた可能性は考えられます。McCullochの『経済学原理』でも似たような話がありますが、それもJ.ミル経由の情報に拠るのかもしれませんが、ただここではそれ以上の詮索は不要でしょう。

ところで自分の修士論文の話で恐縮ですが、僕がリカードについてまとめている最中に、玉野井先生からSweezyが*The Theory of Capitalist Development*(1942)の中で提起し当時欧米で盛んに議論されているTransformation Problemを一緒に勉強してみないかとの誘いがあり、やがて修士論文のテーマもそれへの変更を考えることになったのです。Transformation Problemは当時、日本では「転化問題」と呼ばれて、2, 3論文が現われましたが、それだけで、活発化することもなく、しかもピントのずれた扱いでした。スウィージーの著書『資本主義発展の理論』の問題提起で始まったこの議論は、欧米では次第に数理経済学者が中心になって議論されるようになってくるような時期でしたが、その前にもっぱらポルトキエヴィッチ=スウィージーの三元連立方程式の解法としてnuméraire(ニューメレール)の設定が大きな問題となっていて、玉野井先生が宇野『原論』の理解に基づいて、労働力の価値と生産価格は「転化」に関わらず不変だから、それをニューメレールにしたらどうかといわれたのです。当時の欧米の議論は、価値と生産価格を同一の尺度で測ろう、そしてその尺度に何を選擇ぼうというわけですから、Meekもそれに近い案を主張していました。先生はミークとも手紙で議論されたりしていました。僕はそれでは価値と価格の次元の区別を無意味にする欧米流の「転化問題論争」にはまり込んでしまうので、そうでなく宇野『原論』のように従来の理解を超えたところで議論したらどうかと考えて、なかなか先生と意見が一致しなかったのですが、結局、自分で議論を進めることにしたのです。

僕のそのポルトキエヴィッチやスウィージーに対する批判のポイントが、実はリカードが賃金騰落が価値に及ぼす影響として論じた価値修正論に対する評価の問題と結局同根じゃないか、ということだったのです。ポルトキエヴィッチもスウィージーも、価値と生産価格を同じ尺度で計って比較しているところがポイントなんです。しかも尺度の設定がリカードの『原理』と同様、尺度となる金生産の生産条件、つまり簡単にいえば、資本の有機的構成によって決まるのです。Bortkiewiczの行った有名な $Z=1$ というニューメレールの設定は金生産

の資本構成が中位であるという条件なのですね。総価値=総生産価格というのはそれで決まるし、金生産の資本構成上の位置づけによっては両者の総量は増えもするし減りもする、つまり両者が一致しないことがありうるということなのです。これはリカードがやった「奇妙な効果」と全く同じ発想なのです。「転形問題」論筆はみなそれでやっていたのです。実にたわいのない話なのです。市場での価値通りの交換から生産価格交換に歴史的に移行するという考えも、なかなか捨てきれないでいるマルクス経済学にとって、「転形問題」というのが、総価値=総生産価格というマルクス経済学にとっての絶対的原則と見做されてきたものが揺らぐという新しい難問として登場することになったわけですね。そうなるとう度は価値、価格という概念の比較そのものが必ずしも簡単ではないことがようやく分かってくる——そのはずなんです。今度はそれが分からなくて問題になってくる。結局、生産価格という概念に曖昧なところがあったんですね。

いささか説明を省いているところもあるから分りにくい点もあるかもしれないけれど、時間が無いから先に進みます。

僕はそういうわけで修士論文のテーマをリカードから「転化問題」批判に換えたいと思って、本来の指導教授であった宇野先生を研究室に訪ねて、その趣旨を説明したのですが、全然分かっていただけず追い返され、3度伺ってやっとお許しが出たのです。でも、結局、その論文はどうしても完成に至らなくて、前から準備していたリカードに戻ってそれを完結させ、提出期限最終日にやっとそれを提出したんです。提出後、何日かかけて今度は「転化問題」の方もデッチ上げて何とか完成させ、玉野井先生に読んで頂いたら、これを宇野先生にも読んで頂くようにとのお達しだったので、論文締め切り後だったにもかかわらず、宇野先生を研究室に訪ねて、審査とは関係ありませんが、読んで頂けますか、とお願いしたところ簡単に承諾を頂いたのです。あとはリカード論文の審査を待つだけとなったわけです。つまらぬ個人的な思い出を話してしまいましたが、当時は少なくともその体験は僕にとっては、とても緊張していた時間だったんですよ。

結局、修士論文審査の面接はとても簡単に済みました。経済学史の問題だったせいか質問もほとんどなかったように記憶しています。

だいぶ経ってから、宇野先生が、「マルクスは『クリティーク』(『経済学批判』)の『商品に関する学説史』の中で、リカードは原始的な商品交換の例のところで、

生産に使われた労働手段の計算のために1817年に取引所で使われた年金計算表を利用するという時代錯誤に陥っている、と批判しているが、あれは初版の話だったんだね。僕はリカードの『原理』をいくら探してもそういう表現がなかったので、ずっと疑問に思っていたけれど、やっと解ったよ」と言われて微笑されたことがありました。それは私の修士論文への唯一の感想のお言葉であったことを思い出します。ただ僕は修士論文と一緒に宇野先生に読んで頂いた論文の方が、自分の次に進む方向であると何となく察していたんですね。リカードはもうやめて、宇野『原論』の方に問題関心は自然に移って行ったのでした。話が中途半端でしたが、時間がないので次に移りましょう。

#### 第四章 マルクスの生産価格論 価値から生産価格への転化

すでに見てきたように、*Grundrisse*（『要綱』）は、「資本一般」を論じるもので、多少暗示する内容の叙述はありますが、生産価格論の議論はまだ視野に入っていませんでした。それは先ほど述べたように、『要綱』の次に書かれたマルクスの「23冊ノート」の中で生産価格論の構想として具体的な形で固まり、次の『資本論』草稿を執筆する過程で、その第三部に相当する部分の原稿の中で初めて理論的にまとまった内容をもって登場してきたものでした。

さてここで、先に掲げたマルクスの「経済学プラン」を思い出してみてください。a「資本一般」に続く課題として、b「競争」、c「信用」、d「株式資本」が載っていましたね。『要綱』の中でも最後に、それらと後の生産価格との関連を思わせる問題についても触れています。それをちょっと見ておこうと思いますが、その前に、マルクスは「資本一般」をどのように終わらせているか、こちらを先に見ておきましょう。

『要綱』第3篇の「果実をもたらすものとしての資本剰余価値の利潤への転化」（ここでは高木幸二郎訳から引用しています。古いDietz版*Grundrisse*による高木訳に対して、新しいMEGA版をテキストにした資本論草稿集翻訳委員会訳の『資本論草稿集』とは多少、表現だけでなく内容にもわずかな違いがあるようですが、眼疾のため僕は詳細に内容の異同を検討することができませんでしたので、とりあえず昔利用した旧訳に従っています）と表題を付けられた部分がそれに当たると思います。もちろん、草稿ですから厳密に秩序だって書かれているわけではありませんが、冒頭で、「資本はいまや生産と流通との統一として措定され、それが一定の期間、例えば一年間につくりだす剰余価値は、 $= SZ / p+c$ （但し、SZは剰余価値に回転数を乗じたもの、

$p+c$ は生産期間と流通期間の和である。以下の数式は省略、マルクスはそこでこの数式を色々変形して見せていますが、要は年利潤率の計算が資本構成や流通期間を含む資本の回転期間の相違によって違うということを述べているだけです）である」（*Grundrisse*, 邦訳『要綱』IV, 697頁）と表現されているのは、先に引用して掲げた、現行『資本論』第三部の冒頭の文章とは全く意図が違うようです。しかし利潤率の計算から始まる点では、一般的利潤率の形成から個別資本間の市場における競争という筋道を予感させることは確かでしょう。

マルクスは『要綱』の中でKonkurrenz（競争）という見出しをもった文章を二つ書いているようですが、関連して、例えば利潤率の傾向的低落についての中ですが、次のように言っています。「競争は資本の内的諸法則を執行する。競争はこれを個々の資本に対置して強制法則たらしめるが、しかしそれを発見するのではない。競争はそれを実現するのである」（邦訳『要綱』IV, 704頁）と述べ、アダム・スミスのおしつけられるものでないことをリカードがすでに見抜いていたことを指摘しています。

ところで、別なところですが、マルクスは個別資本にとっては必ずしも利潤が剰余価値に等しくなるわけではなく、資本の条件によって、必ずしも同じではないことを指摘し、さらに総利潤は総剰余価値と合致することを付け加えながら、「この考察はのちに多数の資本の考察においておこなうことであって、まだここで問題にすべきではない」（同上713頁）と述べて詳細な説明は避けているところがあります。

これがどの段階で書かれたのか不明ですが、「競争論」の名称の付いた一纏めの草稿の中で述べられているように、マルクスは利潤率を細かく検討する中で、生産価格の概念にかなり近づいた議論をしています。面白いところなので引用しておきましょう。

「競争のうちこそ、価値と剰余価値にかんしてたてられた基本法則とは区別して展開される基本法則、すなわち価値はそれに含まれた労働、またはそれが生産されるのにかかった労働時間によって規定されないで、それが生産されるのにかかる労働時間または再生産のために必要な労働時間によって規定されるという基本法則が存在する。競争によって個別的資本は、現実にはじめて総体としての資本の諸条件のなかにおかれるのであって、このばあい当初の法則はまるでくつがえされたかのような仮象を呈する。資本それ自体の運動によって規定されたものとしての必要労働時間は、だがこのようにはじめて措定された。これが競争の基本法則である。需要、供給、価格、（生産費用）は、それにつづく形態諸規定

である。市場価格としての価格、または一般的価格、次には一般的利潤率の措定。市場価格《の作用》の結果として、そのさい諸資本は種々の部門に配分される。生産費用の引下げ、等。要するにここではいっさいの諸規定が資本一般の場合とは反対のかたちで現れる。さきのばあいには価格は労働によって規定されたが、ここでは労働が価格によって規定される、等々。個別諸資本の相互的行動は、ちょうどそれらが資本としてふるまわなければならないようになしおわせる。個別資本の外見的には独立した行動とそれらの無規制な衝突が、まさにそれらの一般的法則の措定である。ここでは市場はなお別の意義をうけとる。個別諸資本としての諸資本の相互的行動が、こうしてまさに、一般的諸資本としてのそれらの措定となり、また個別資本の外見的独立性と自立的存在との止揚となる」(同上、Ⅲ、606～07頁)。

そして実はその先にも、こんな言葉を付け加えています。すなわち、

「それだけでなくこの止揚は、信用においてもおこなわれる。そしてこの止揚のいきつく究極の形態—だがそれは同時に資本に適応したその形態での資本の終局的措定である—は、すなわち株式資本である」(同上、607頁)。

というものです。「資本一般」の先の構想の最後の部分が、いわば一言で纏められているとも言えるかもしれません。もちろん、現行の『資本論』第三部の構成では、その構想プランがまだ部分的に残っているのかもしれませんが、事実上、「資本一般」の範囲を超えているし、大分前に引用した『資本論』第三部の冒頭の文章にみられる見解とは、似ているところもありますが、明らかにその方法を異にするものとして理解しなければならないもののように思われます。明らかに第2篇の草稿が先に書かれたものでしょう。現行の『資本論』第三部は確かに個別資本の現実的な競争の姿態が描かれることが明らかといえるもので、その展開の過程は、エンゲルスがマルクスの原稿からなぜか削除したと言われる Gestaltungen (現実的諸姿態の形成)としての「資本主義的生産の総過程」(マルクス自身の草稿では「総過程の(現実的)諸姿態」《Die Gestaltungen der Gesamtprozess》)論なのではなかったかと考えるのです。そしてその「経済学批判」プランの変更さえ含むような新しく確立された方法がこの第三部で徹底して展開できているかどうかが、僕は問題だと言いたいわけです。ここではとくに第2篇の生産価格の形成論が問題なのです。

そこでは全体の資本を形式的に五部門に分けてその間で剰余価値を平等に分け合う関係の成立のように配分するという形で説かれています。今まで何度も言うように、マルクスはこの第三部の冒頭で、第三部の課題として主張したのが、資本の運動過程から導き出された

具体的な諸姿態を見いだして説明することだと言っていたわけです。剰余価値をただ利潤として配分するというだけではありません。第一部、第二部とは違うんです。すでに新しい方法論の段階に入っているのです。マルクスが現行『資本論』第三部の第1篇で、すでに資本構成やエンゲルスがマルクスの意図をくんで追加した回転期間の違いや固定資本の耐用期間から年利潤率の計算式を述べていたことを思い出してほしいのです。剰余価値率とはすでに論じる次元が違っていることに気づかれるのではないですか。まして『資本論』をすでに読んで、その内容を承知している皆さんにとっては、それらの価値から生産価格への転化なるものの過程が、まず価値での交換があって、しかる後にまず同一部門での利潤の平均化、次に異部門間の競争を通したさらなる平均化によって生産価格が成立するという、そもそも存在しえない前提の下で議論が進められているというストーリーで、マルクスの叙述が進められていたことを思い出されるに違いありません。このところはマルクスの原稿をほとんどそのままエンゲルスが用いて編集したと言われ、またエンゲルスがかつていかなる経済学者も果たし得なかったマルクスの偉業であると称えた部分でもあります。したがってエンゲルスの称賛の言葉に、というか、マルクスの「偉業」にも、なお徹底すべき点が残されているのではなかったかという感想も感じざるを得ません。

マルクス自身も、生産価格を構成する費用価格が、同時にまた価値から生産価格に「転化」という事実気が付いた時、「転化」の問題の困難さに思い知らされたのではないのでしょうか。だからこそその問題のさらなる追求を気にかけてながらも、やめているのではないのでしょうか。無限の算術計算に追い込まれるか、あるいは、リカードのように修正は些細な違いとして気にしないように勤めるか、ということになったかもしれません。マルクスも総価値と総生産価格は合致することになっているとさすがに言い切れないことを自覚しているはずで、マルクスがよく知られているように、『資本論』の当該箇所、わざわざ「この問題はこれ以上扱わない」と勝手に決めてしまったことは、多分皆さんもご承知でしょう。宇野先生も、古い方の『経済原論』で実は数ページにわたってその問題に格闘しておられます。「転化問題」が日本に紹介されるかなり前ですから、マルクス経済学者として珍しい記述です。僕はそれを読んだ時に、さすがとあってびっくりしました。ポルトキエヴィチ＝スウィージーがその問題をとらえて代数でやれば同時決着が可能であることを教えたのですが、それはそう簡単な問題ではなく、総価値＝総生産価格という重大なマルクス命題に多大な否定的影響をもたらすものであること

も明らかにしてしまいました。そこで改めて価値概念が問われることになったのです。両者を＝（イコール）でつなぐことが出来るのか、が改めて問われたのです。その問題についてはすでに触れましたように、内的規定に留めるならまだしも、本来、内面的規定である価値の存在を現実化して生産価格という具体的な規定と同列に扱って同じ尺度で計ると、資本の構成や回転期間の長さなどによって、総価値と総生産価格の一致は簡単には得られるものではなく、また費用価格の価値からの生産価格化への追求に及べば、ここに資本家の消費する贅品は消費されるだけで再生産過程には加わらないなどの細かい注文が入ってくると、これまた総価値と総生産価格の一致が簡単には得られなくなってくるという事態が容易に出てくることになるんです。

話があるいは簡単すぎてよく分からない方もいらっしゃるかもしれませんが、ほとんどの皆さんは僕がずっとやってきた論題についてご存じだと勝手に決めてしまっていて、細かな点は時間の都合で省略させていただいたこと、お許しいただきたいと思います。必要ならスウィージーの『資本主義発展の理論』の第7章をもう一度ご覧になってみてください。さもないと僕が『生産価格の理論』（1968）をご参照ください。

なお、もう少しその問題の視点を『資本論』から宇野『経済原論』の方に広げて、さらに考察を続けたいと思います。

## 第五章 価値・生産価格の次元の相異論と労働価値説の論証問題

先に、僕の修士論文と、それとほぼ同時に、修士論文とは別に書いた「転形問題」に関わる論文を宇野先生に読んで頂いたという話をしました。しかしその論文がどんな内容のものだったか正直覚えていません。当時はコピー機などあったのかもしれませんが見たこともなく簡単には使えなかったし、下書きも手元に残っていません。でも、僕がその後、博士課程に無事進学できた時、宇野先生に、「転形問題」について「演習で報告をしなさい」と言われたのです。それで五月ぐらいだったか、新学期の比較的早い時期に、大学院の演習で報告したんです。宇野先生が定年で東大をお辞めになる最後の年度の演習でしたね。前年に書いた僕の論文はその頃、ちゃんとしたものになっていたかどうか、書き直しが済んでいても、多分、玉野井先生に、あれは印刷しておいた方がいいと勧められていたので、印刷をどうしたら出来るのか思案中だったのではなかったかな、よく覚えていません。

ゼミの報告の方は、とにかくあまり自信がないので、

前の年に論文に書いたようなことを簡単な形で早口でペラペラ報告したんだけど、聞きづらかったかもしれない。先生の退管前の最後の年の演習だったので聴講する外部の出席者も結構多かったんです。宇野先生はとくに質問をされることもなかったと記憶しています。でも終わった後、何人か出席していた人が質問に来て、最後に、大学院に入ってきたばかりの吉富勝君が、僕の報告の準備のためのペーパーを読みたいから貸してくれと言って持って行ってしまったんですよ。もちろんあとで返してくれたけれど、乱雑な字で、しかも文章化していないメモのようなもの3、4枚だったのですが、断ったんですよ。でも読ませてくれと言って強引にもって行ってしまった。それも今は残っていないから自分でも内容は覚えていないんです。でもしゃべる内容が今と当時で大きく変わっているはずもない。それでも何も覚えていないのは緊張していたんでしょうね。

ただ、その前の年、修士論文のテーマのことで宇野先生のところへ何度か相談に行き、怒られながらご意見を伺っていた時のことを思い出してみれば、結局、「転形問題」を通じて問題になった価値と生産価格との関係を扱ったものに間違いはないんですよ。総価値と総生産価格が一致する、しない、という議論だったから宇野先生も最初にご機嫌が悪かったわけ。総価値と総生産価格の一致命題はマルクス経済学の大鉄則でしたからね。ところがなんで両者が比較できるのかという問題になった時にやっと、先生がまともに話を聞いてくださったわけです。ずっと後になって、宇野先生が座談会形式の著書『資本論五十年』の中で、「あれは櫻井君が大学院の時僕に出してきた問題で…」、というようなことをおっしゃっていたので、先生は覚えていてくれているんだなあと、思ってあとで嬉しかったです。ただその座談会には僕も実は出ていたんだけど、その発言の記憶はないんです。

話がついに余計なことに及んでしまいますが、とにかく修士論文のテーマのことで相談に行ったその時、価値から生産価格への転化を説く際に歴史的転化はもちろん否定した上で、等価交換の理論的前提や、生産価格に対する価値法則の規制をどう説明するか、などを『資本論』に対する宇野『原論』との比較で問題にしたことはありました。宇野先生の「労働＝生産過程」論は資本主義の「総過程」のいわば具体的世界に対する内面的な「透視図」で、価値と生産価格の関係は本質と現象との関係だとも言ったかどうかははっきりしませんが、そんな気持ちであったことは確かです。少なくとも価値から生産価格に修正するという展開を、宇野先生が『資本論』からほとんどそのまま受け継いでいるのが僕は正直気に入らな

かったわけなんです。もちろんそんなにはっきり先生に言えたわけではありませんがね。ろくに知識もない僕のような未熟な学生が大先生にそんなこと言えるわけがない。説明している中で、宇野先生にいくらか解って頂けたと感じたのは費用価格における価値から生産価格への転化の問題を、宇野先生が旧『原論』の中で詳細に解説されている点に及んだ時でしたかね。そこまで論じている本は、宇野先生のその『原論』以外にはそれまで見当たらなかったのですよ。しかも「転形問題」論争でその点が盛んに議論されるはるか前の話ですからね。そのことをお話しすると、先生も満足そうなお顔をされていました。その時初めて先生と議論の論点を共有していると感じました。

先生はその年度末の3月、定年で東京大学をお辞めになり、法政大学に移ります。我々は先生の大学院での直接的指導はもう受けられなくなったのですけれど、関係はずっと続いていて、先生を編者とする『資本論研究』全5巻などの書籍作りにも動員され、そういう機会にも鎌倉の公務員宿舎などで繰り返し長時間にわたる泊りがけの研究会などをやっていました。また先生を中心とした法政大学の宇野理論グループで行う合宿スタイルの研究会「Qの会」にも、降旗氏や僕は常時参加していましたし、他の宇野ゼミ・メンバーも適宜参加していましたね。また、時に暇ができると、法政大学の講師室までわざわざ出向いて、講義の合間の時間に、先生を中心に集まって談笑している法政大学の若手教員たちの仲間に加えてもらい、学問の話やご趣味の文学論、学界の情報ないし裏話などに興じたものです。

ところで東大の大学院の方の宇野先生の後には、鈴木鴻一郎先生が実質的に演習生もほぼ全員引き継がれたわけなんです。やがてここに鈴木＝岩田理論というのが出てきて、宇野派の中に、皆さんご承知のように、宇野正統派に対する異論が唱えられるようになってくるんですね。その急先鋒は岩田弘＝降旗節雄両氏で、大学院だけでなく学部の鈴木鴻一郎先生のゼミにも積極的に参加し、そのゼミの中から侘美君や伊藤誠君などの俊才が登場してくるわけです。鈴木＝岩田理論なるものの出現であり普及ですね。その点にはやはり少しは触れておかななくてはならない。先程から論じてきた価値と生産価格の問題にも大いに関わりがあるからなんです。

話は少し戻るのですが、博士課程に進学出来て、少し落ち着いた頃、僕は玉野井先生に、「例の『転化問題』を扱った論文をきちんと書き直して論文の体裁も整えて、何とか活字にしておきなさい」とお勧めを頂いたの

です。それは有難いお言葉だったのです。たださっきちょっと話しましたが、そのための方法が分からないのです。大学院に入ってまだ2年しか経っていない。やっと博士課程に入ったばかりの学生ですから、どうしてよいか分からない。東大の大学院にはまだ院生の論文発表のための論集の刊行など、院生による発行の要求すら出ていない時代だったし、東大の『経済学論集』には掲載してくれるはずもない。というのは大学院の組織もまだ「社会科学研究所」で「経済学研究所」ではなかったのです。僕らが大学院を去った後に組織も変わって、現在の経済学部につながる「経済学研究所」に変更されましたが、まだ当時は、新制の大学院が出来て間もない時期で、経済学部とは離れた、それまでは農業経済などを含めたもう少し広い組織だったんです。だから当然『論集』掲載などは当時はまったく問題にもならない。もちろん商業雑誌なんか無理であることは承知している。

それでやむなく、ろくに通学もしていなかったけれども、とにかく実際に卒業した武蔵大学で唯一話ができる小沢辰男先生という助教授の先生に相談してみたんですよ。僕は、ご存じの方もおられると思うけど、病気療養のため武蔵大学入学当初から3年まで在籍はしていたんですが、学校には通っていなかったんです。3年経ったとき、病状がなかなか好転しないので手術が必要か、ということで改めて精密検査したところ、医者から治っていると突然告げられてびっくりしたんですが、その辺の話をすればキリがないので、しません。ともかく、それから、4年生、5年生と1年留年して、実質2年間努力して単位をかき集めて卒業資格を得て、大学院に入ることが出来たんです。大学に行かない間にも、当時大学の方の教授になっておられた高校時代の恩師の助言で、語学の全単位と教養科目を2、3こっそり取っておいたのがよかったんですね。復学した後の2年間に学内で僕は授業外の色々なこともやり始めていて、小沢先生ともそういう課外の活動で知り合い、何かとお世話になったのです。

その先生にさっきの話をしたんですが、それでは『武蔵大学論集』に掲載してもらえるか聞いてやろうということになったのですが、大体、教授会の先生方は僕のことには全然知らない。当たり前のように思われるかもしれませんが、武蔵大学は当時、きわめて少人数の大学ですから、お互いほとんど顔なじみなんです。僕は大学に顔を出していないから誰も名前も顔も知らない。武蔵大学の卒業生で他大学の大学院に進学し、修士号を取り研究を続けているというだけで『論集』に寄稿させていただきとはずうずうしい、投稿資格はないと一蹴されたんです。当然ですね。でも小沢先生は粘って学部長の鈴木

武雄先生に頼み込んで、なんとか特例として認めて頂いたのです。お陰で論文印刷になることが出来たんです。今になると、多くの先生のお世話になったことの結果に、何か運命的なものを感じますよ、本当に。

でも、実際にその論文の掲載された雑誌が出たのは、多分、一年近く経った翌年だったと記憶しますが、ともかくやっと抜き刷りが出来て諸先生や大学院の仲間に配ったんですが、評判は良くなかった。ただ岩田弘さんは褒めてくれたんです。公文俊平君も、「岩田さん褒めていましたよ」とわざわざ教えてくれた。ところが僕は、その理由がその時はよく分からなかったんです。岩田さんは秀才で、しかも知識も豊富な大変な勉強家です。『利潤論研究』に彼の書いた生産価格の成立についての論文に関して、「君のとおなじですよ」と何時も遠慮がちにそう言っていたんですが、正直、そんなはずないだろうと思っていたんです。でも、あとになって理由が分かってきたんですが、その後、岩田さんは「原理論」を、「世界資本主義の内面化」だと言いはじめて、今度は本当の意味で僕の腑に落ちなくなってしまったんです。「原理」の成立根拠を二通りで考えるのは無理だな、とね、本当に腑に落ちなかった。

ところで、その僕の処女論文「価値の生産価格への転化について—ポルトケヴィッツといわゆる『転化問題』」(1958)は後に、題名の中の人名「ポルトケヴィッツ」を大谷瑞郎先生のご指摘で「ポルトケヴィッチ」に改めて、僕の論文集『宇野理論と資本論』(1979)の末尾に、拙い論文でしたが、付論としてそのまま記念に載せておきました。もっとも「処女作に還る」という言葉がありますが、今回改めてちょっと眺めてみたら今と大して考えに変わり映えがしないんですね。進歩していない。別な意味でがっかりした面も正直あります。

さて、これから先は今度は急に鈴木鴻一郎先生の演習の話に変わりますのでご注意ください。

宇野演習は宇野先生が定年で東大を退官された後、先ほどちょっと触れましたように、ほとんど全員が鈴木先生の演習に入りました。僕もそうしたのですが、玉野井先生は玉野井先生の演習に来ると考えられていたかもしれないんです。僕は正直とても難しい立場にいたんです。その頃、玉野井先生の編集で『マルクス価格理論の再検討』(1962)という論文集が準備中で、僕はその第1章と第2章を担当していたんですが、あとの五つの論文は、いわゆる近経寄り、もしくは完全な近代経済学の論文だったんです。玉野井先生の本に載せた僕の論文は、この水準ではまだまだ駄目だが、続く論文のように近経の手法をもっと取り入れるとだんだんよくなるという見本

みたいな全体的な位置づけになっているじゃないかと、僕を気の毒がってくれた人もいました。

玉野井先生はいろいろなことに興味をお持ちの先生で、そのころ、近代経済学の領域にも関心をお持ちになっていました。マルクス経済学から近代経済学へ関心を移す者も玉野井先生の周りに集まり始めたかもしれません。そして他方、自由で開放的な鈴木ゼミの方は近経の話は逆に御法度だったんですよ。そして僕の参加したその本は近経の本じゃないかというわけで、それに加わるのはどういうことか、といわれそうで、立場はとても苦しかったですね。色々あったんですが、その問題にはこれ以上触れません。ただ、僕は、他方で、鈴木ゼミの博士課程のメンバーとして、鈴木先生の編集になる論文集『利潤論研究』(1960)に論文を寄稿させていただき、さらにまた先生の編著書『経済学原理論上・下』にも共同執筆者に名を連ねさせていただいてもいたんです。

『利潤論研究』の方に書いたものは、僕の従来の生産価格の考えをさらに徹底し、同時にそれを市場価値論の市場生産価格論への改編にまで広げたもの。そして『原理論』の方は、僕の担当した部分は、編者の手で書き直されてもう分からなくなっています。ですが、その価値論や生産価格論の中に、僕の考えに近い考えが生かされている気がするんですね。同じ『利潤論研究』に寄稿した岩田さんは、マルクスの生産価格論の成立の諸前提を、いわば『資本論』第三部の方法論の新たな確立の問題として説こうとしているんですが、岩田さんは「君が書いたのと同じことだよ」と何度も言っていて、僕はずいぶん後まで、その論文だけ読んでもその意味がよく解らなかつたんです。『原理論』の下巻の方も同じ方法が採られているんですが、読んでむしろ教えられることの方が多かった。でも、今考えてみると、僕が次元が違う問題として、価値と生産価格を区別しながら、同時にその問題を同じ対象の本質とその現象形態として次元の相異論としてとらえていたことと、あるいは価値論の論証で宇野先生の奇妙な論証を飛ばして採用していなかったことなどからも想像できるように、岩田さんとはほとんど共通の土壌の上で同じように労働価値説の本質的課題を、主として宇野先生の「労働＝生産過程」の視角からとらえていたことがよく分かるんです。

岩田さんとは、その後、彼の「世界資本主義論」に反対する宇野正統派として残る僕らとは理論的には対立するんですけども、実は労働価値説の論証問題としての扱いは、岩田さんと僕とは宇野先生の使っている直接の論証方法は採用せず、抽象的な「労働＝生産過程」論の範囲内にほぼとどめている点は同じなだけで、彼がそれを「世界資本主義の内面化」だと言い張る限りでは、



僕は岩田理論には反対だということになるんです。すでに言ったことですが、世界資本主義の中核産業としてのイギリスの綿工業および世界貿易を通ずるその商品経済的世界的連関と、一般的な概念としての労働・生産過程論からそれを軸として完結した分業体制を価値関係として展開するのは全然違う話だと考えるからです。

結局は、労働価値説の論証という問題になるんですが、内容はすでにお分かりのことでしょう。

でも改めて言うと、議論はこういうことです。まず宇野先生が行っている価値論の生産過程論での論証というのがあって、僕はそれを正面から批判しているんですが、岩田さんは鈴木『原理論』では宇野先生の方法にはまったく触れていません。

マルクスはご承知のようにその商品論のところで、二つの商品をイコールで結び付けてそれが可能なのは、両者に抽象的人間労働が同量含まれているからだ、という形で価値論の論証に代えているんですが、バーム＝バヴェルクの「蒸留法」批判で有名なところですね。それに対して流通論を生産過程論から独立させた宇野先生の『原論』の体系としては、それはできない。そのため資本の生産過程論で論証をおこなうとされるわけですね。そこから新しい問題が展開されることになります。章を変えてその問題を考察することにしましょう。

## 第六章 「労働価値説」の論証問題

宇野先生の『経済原論』の場合、「生産論」は「労働＝生産過程」論から始まります。現行『資本論』第一部の場合、第3篇「絶対的剰余価値の生産」の最初の第5章「労働過程と価値増殖過程」、その冒頭の第1節で「労働過程」を説いています。そのマルクスの「労働過程」では、「人間は、自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し規制し制御する」(Marx=Engels Werke, Bd. 23, S. 192, 邦訳『資本論』I a, 234頁)とされています。「労働過程」は、人間が主体となって何らかの労働手段を用いて自然対象に働きかけ、そこから人間にとって必要な有用物を取得する過程であり、それはあらゆる社会のあらゆる生産に共通なものといっているのですが、その過程を生産された生産物からみれば、労働手段と労働対象とは生産手段として現れることになり、労働そのものは生産的労働として現れるということになります。その観点で見ればこれは明らかに「生産過程」としての立場で見ることになります。マルクスはそこで労働過程と生産過程とを内容的に区別はしているのですが、「労働過程」論のところでも両者を同時に説いているので分かりにくいところがあります。決定的と思われるのは「労働の二重性」で、それを生産過程一般の問

題としてではなく、その後の「資本の生産過程」のところで説いているために、資本主義経済に特有なものにとられがちですが、そうではなく、あらゆる社会に共通な生産過程一般にイえる規定と考えなければなりません。マルクスも事実上、そうしているとも考えられると思います。しかし宇野先生が「労働＝生産過程」として、とくにその「労働の二重性」を含めた「生産過程」を特殊な「資本主義的生産過程」とは区別して、普遍的な規定として明示的に示したことは、極めて注目すべき改善点だと考えられます。労働価値説の論証問題にとっても決定的に重要な論点になっていると僕は考えています。

宇野先生は1964年に刊行した縮小版のいわゆる新『経済原論』の中で注記して次のように述べています。これは見逃し難い叙述です。すなわち、こう言われるのです。——「商品の交換が、その商品の生産に要する労働時間を基準とする、その価値によって規制せられるということは、如何なる社会にあっても、何らかの生産物をうるには、時によっては、また人によっては異なるにしても、一定量の労働を要するものであるという一般的な原則に基くものであって、いわゆる労働価値説はこれだけでも否定しえないものと考えてよいのであるが、しかし商品の価値の実体を労働と規定し、その法則的展開を論証するということは、それだけでは十分ではない」(宇野, 新『原論』55頁)と述べ、さらにマルクスの論証方法を批判され、同時にご自身のそれに代わる論証方法を試みられています。

僕は、この注記を初めて読んだ時には、「労働価値説はこれだけでも否定しえない」という断定的な表現にびっくりしたんですが、同時に、この断定に大いに納得したものです。すでにその方向性で我々も考えていたからです。宇野先生がこの途中で止めないで、ご自身の積極的な主張にさらに進まれたというところに、かえって逆に問題を残してしまったと考えるのです。実際、「これだけでも否定しえない」という発言こそ、極めて大胆で、やや不十分な表現ではありますが、理論的にも真実な方向性を示したものとも考えるからです。

もう少しその内容を考えてみましょう。すでに見たように、生産過程において、人間が生産手段を労働手段及び労働対象として消費し、一方で合目的な具体的労働の支出の面を通して労働の対象を人間に有用な使用価値に変え、生産手段の生産に要した労働を新生産物に移転することで保存し、他方で過去に生産手段の生産に要した労働時間をそこで現に支出された労働と同質の抽象的人間労働として規定するという二重の労働活動は、明らかにあらゆる生産に普遍的なものといえるものですが、

同時にそれは人間労働の一定の量の支出であって、その使用価値は人間労働の対象化であり、また生産手段がすでに人間労働によって生産されたものであれば、具体的有用労働の媒介によって、過去に生産された生産手段も抽象的人間労働の対象化に加えられると考えることができるので、両者の合計が新たな生産物に対象化された抽象的人間労働の量だということになります。今更皆さんに説明するまでのことではなかったのですが、要するに、ここではその人間労働が、一方では具体的有用労働として、そして他方では抽象的人間労働として二重に機能しているということでありまして、これがマルクスの「労働の二重性」であり、宇野先生が、それをマルクスの特殊資本主義的規定の枠から外して、あらゆる社会に共通な一般的規定と特徴づけられたものであることをここで確認したわけです。

問題なのは抽象的人間労働の支出で、それが価値として量的な規定性を与えられていることです。

ここには労働価値説の問題の根源が潜みます。すでに見たように、マルクスは最初の商品論ですぐ労働価値説の論証に入りました。宇野先生がそれを退けて、労働価値説の論証を資本の生産過程論に持ち込まれたことはここで改めて言うまでもないでしょう。

マルクスは旧来の経済学の批判を掲げながら古典派の労働価値説は継承していたのです。マルクスは明らかに、スミス、リカードの労働価値説の継承から出発しています。労働が価値の原因であることを前提にしています。

確かに人間が必要とするもののほとんどが人間労働の産物であることは疑いようがありません。マルクスが「資本一般」を論じるにあたって、まず考えたことは、論述の出発点を「労働」あるいは「生産」に置くことでした。しかしすでに見たようにそれをやめて、「経済学批判」のプランの中で「商品」を「序説」として冒頭に置いたのです。実際、マルクスが『資本論』の誰もが知る冒頭の言葉ではっきり述べているように、「資本主義の生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現れ、一つ一つの商品はその富の基本形態として現れる。それゆえ、我々の研究は商品の分析から始まる」(Marx=Engels Werke, Bd. 23, S. 49, 邦訳『資本論』I a, 47頁)とされていることからいっても当然のことです。

ご承知のように、マルクスは『資本論』の初めてで価値論を展開し、そこからさらに価値形態論を詳しく論じて、価値の大きさは価格でしか測れないことをはっきり証明しています。しかし、ご存じのように、マルクスは他方で、労働価値説を前提において、商品の使用価値を捨象

することで、そこに含まれる抽象的人間労働の量による価値の量的決定を導き、その問題の真の解決を事実上回避しています。けれども商品の価値量は価格で計られる以外に方法がないことは、マルクス自身が他方、価値形態論で明らかにしていることなのです。マルクスはそこであまりに安易に古典派以来の労働価値説に頼ってしまったのではないかと想像するのです。

確かに商品の価値の終局的な根拠は人間労働にあるかもしれない。しかし「価値」とは何か。大体どういう意味なのか。Wertとかvalueとか言われていますが、その意味が難しい。以前からいろいろ解釈がありますが、僕は「価値」＝「交換する価値のあるもの」という意味で考えると分かり易いと思っています。とりあえず使用価値を持ち、交換可能性のある価値を持つものというのが商品の二要因であり、論理的にはまず「価値あるもの」であることが商品の最初の条件になるということでしょう。使用価値はあっても価値のないものは自然界にたくさんあります。売れないもの、誰も金を出して買わないもの、です。しかし、市場に提供されるものであっても、マルクスが言うように、(そしてかつてエンゲルスが『国民経済学批判大綱』で考えていたように)、価値があるとしても、その大きさ(価値量)は市場での評価でしか分からない。それで交換に提供して購買者に値を付けてもらう、ということになるのだと思います。要するに、物は最終的には貨幣で値が付けられるということですね。

そうすると他方で価値量が抽象的人間労働の投下量で計られるとはどういうことか、です。それが簡単でないことはすぐわかりますね。労働の形は個人がおかれた歴史的状況によってさまざまな形をとります。機械化による合理化が進めば労働は単純化して平均化される、と説明もされます。でも投下された労働量の計測は無理でしょう。むしろほとんどのものが人間の労働で作られるという極めておぼろげな把握はできても、それ以上は無理なのではないでしょうか。ただそれが、労働力の商品化を通して、あらゆる生産が資本主義化することで普遍化して、抽象的人間労働の観念が一般化するということではあっても、それ以上はないのではないのでしょうか。実際、価値の原因として人間労働の支出があるにしても、そのそれぞれの量が判るはずはありません。ただそれでも人間労働の支出は認めているわけだし、経済原則的に労働配分は適切になされているはずだ、ということで、個々の商品の価値が投下労働量によって決定されるという、いわゆる労働価値説とは言えないまでも、その労働による商品の価値の根拠付けは認めることはできるわけです。先に引用したように、宇野先生が、労働＝生産過

程」までの説明で十分なのだが、と言われたのはそういうことではなかったのではないのでしょうか。もちろん宇野先生がそこでは関説しておられない労働力の商品化とその労働提供を通じた特殊「資本主義的生産過程」の問題は落とすことの出来ない条件ではあると思いますが、それに留意すれば、労働価値説の説明には十分だと思います。

ところが宇野先生は、結局、それでは不十分だととしてさらに証明をされようとしていたことは先に述べたとおりです。それはどんなことなのか、簡単に見ておきましょう。こういう風に、説明されているのです。

皆さんご承知のことをくどくど話す必要はないので大分端折りますが、ご承知のように資本の生産過程で消費される労働者の労働は、必要労働と剰余労働とからなっています。前者は労働者が生活するために必要な生活資料を生産するための労働量とされています。そして後者は必要労働を超えてそれ以上に労働してその成果を資本家に無償で提供する部分です。資本家にとっては利潤の源泉であり、マルクスはそれを剰余労働と名付けました。しかしこれも、あらゆる社会に共通に存在する経済原則の範囲内の問題で、労働＝生産過程論であらかじめ説かれていなければなりません。労働できない老人、病人、子供などの生存の確保あるいは外敵からの種族の保護、防衛や社会全体の拡大再生産の原資として必要なものなのです。

宇野先生は「労働で買い戻す」という巧みな表現をよく使用されますが、実際、労働者が自らあるいは家族を含めて、その生活維持を確保するために、自らの労働をもって必要な生活資料を市場から買い戻す、という意味で使用されます。これが生活資料の価値が必要労働によって決定されるという理屈につながっていきます。労働者が資本家から支払われた賃金で購入した生活資料が、全体としては、労働者が必要労働として支出した自己労働量に合致したものとなるという説明です。労働者は自ら労働して生産したものを直接生活資料として入手することは普通無いから、自ら得た賃金で生活資料を市場を通して買い戻すという関係にあるということになります。宇野先生の説明は、——「単に労働生産物が商品として交換されるというのではなく、生産過程自身が商品形態をもって行われることを示すものにほかならない。かくしてまたあらゆる生産物がその生産に要する労働時間によってえられるという労働生産過程の一般的原則は、商品経済の下にあっては、その交換の基準としての価値法則としてあらわれる」（宇野、新『原論』55頁）というものです。これは甚だしく難解ではありますが、少なくとも、この説明によっても、あらゆる商品がその

生産に投下された抽象的人間労働の量によってその価値を規定されるということの証明にはならないと思います。買い戻すのは生活資料の総量であって、個々の商品全てについてではないわけですが、問題になるのは個々の商品の価値量の決定です。またそこには生産手段の価値の問題も含まれてくるわけですが、宇野先生はさらに、生活資料の投下労働量による価値の決定が証明されれば、生産手段も当然そうなると言われるのですが、その過程の説明もなく、それも無理でしょう。労働者の生活手段ではないが、資本家だけの消費手段はどうなるのか、等々の問題が出てくると、さらに面倒なことになる。この論証にはどうしても無理があると思えないのです。ここでの宇野先生の説明には到底納得できないわけですが、

それだけでなく、大体、何故商品価値での交換に固執し、それを証明しなければならないと考えるのかが、疑問となって引っかかってくるのです。そこには純粋な資本主義社会という想定下で経済原則的な労働配分が存在し、それが商品の価値量の社会的配分という結果として現れているという理解が潜むものと思われます。しかし、それはどうやって計られるのか。宇野先生はそれを経済原則としての内面的な規定として理解しているのか、それとも価値での交換としてより現実的に理解されているのかが問題であり、後者に傾斜しているようで、はなはだはっきりしていなかったのです。これではマルクスと同じではないかと、僕が当初から疑問を持っていたのはその点であったのです。

そしてそのような理解は、マルクス経済学に対する大きな疑問として依然立ち現れているだけでなく、今度はさらに『資本論』第三部第2篇の価値が生産価格に転化するという問題に関連して、別の大きな疑念に逢着することになったのです。それはすでにエンゲルスが、マルクスの原稿から『資本論』第二部を編集、発行した際に付された「序文」に始まり、続く第三部にも付された同じくエンゲルスの「序文」と「補遺」の挑戦的な問題提起につながる問題とその解決、そしてその系譜を継ぐヒルファディングの理解などとは全く違った、別の新しい問題領域と言っているものでした。それは先にも触れたボルトケヴィチ＝スウィージーのいわゆる「転形問題」からする新しい問題提起がきっかけで生じた問題にも関係してくるのです。

それまで価値が生産価格に変化（転化）しても、それは剰余価値の再配分で全体としては過不足なく配分され尽くされるのだから、総量としては合致し、価値法則は貫かれると呑気に考えていたところに、「転形問題」の提起によって価値と生産価格が同質だとすると、その「転

化]の際の条件次第でそれらが成り立たないことがある、という問題が出てきたのです。これはすでに説明しましたね。さらに言えば生産価格に占める費用価格にも「価値から生産価格への転化」が避けられないことが分かったからでもあります。価値交換が前提されていて、それが生産価格に転化した場合、社会的労働配分が変化すると考えているのかどうか、歴史的な「転化」を考える人はそれでもいいかもしれませんが、この転化を理論的に考えようとする人はそれでは困るでしょう。それは、だから、同じ対象の中で次元を異にする内面的関係と外面的現象形態とに見方を分けて考える以外にないでしょう。マルクスの場合、どちらかという、「資本一般」の領域で総資本を五つに任意に分けて説明しているくらいがあります。個別資本の登場というよりも、総資本の平均的な分割部分による抽象的な説明にすぎないように見えます。そこで市場における個別資本間の競争による利潤率の平均化を通じた生産価格の成立を、いわば内面的な形で説明しようとしている意図がうかがわれます。仮にそうだとすると、すでに最初に見たように、それらはマルクスの『資本論』第三部の構想がなお成熟した一貫した叙述を持っていなかったことの証明でしかありません。もちろんマルクス自身も商品の価値通りの交換に依然として執着していましたから、叙述はどうしても混乱してしまいます。マルクス経済学者においてももちろんそうなります。宇野先生も例外ではなかったと考えます。

それではどうしたらよいか、当然次の問題にならざるを得ません。章を改めて考えることにしましょう。

## 第七章 生産価格の内的基礎としての社会的労働配分

——資本主義社会での商品の価値概念を考える——

マルクスは、すでにお話したように、現行の『資本論』第三部の冒頭で、第三部が、それまでの第一部、第二部の内容の「統一」あるいはその「反省」ではなくて、「全体としてみた資本の運動過程から出てくる具体的な諸形態を見いだして叙述することである」（前出）と述べていました。これは若干の省略などあるものの、マルクスの遺した第三部の草稿に比較的に近い文章（エンゲルスがマルクスの遺した原稿から作成した文章として）だと言われています。従来の資本の一般的規定から資本主義の現実の形態にどのようにその姿態を変えてゆくかの過程を明らかにしながら、それらの具体的な諸形態を叙述して説明することを目的とすると明言しているということでしょう。これは明らかに、同じ対象でも扱う次元が今までの抽象的で内面的な規定とは違って個別的で具体

的な領域のものであることを告げるものといえます。

ただこれに問題があるとすれば、この第三部第1篇第1章のこの叙述に示された方法が、第2篇以下の展開では必ずしも一貫性が貫かれているとは言えないのではないかとことでした。とりあえず問題なのは、第1篇に続く第2篇の「利潤の平均利潤への転化」で事実上説明される生産価格概念の成立過程の叙述です。それも同じくマルクスの草稿を基にしてそれをエンゲルスが苦勞して編集し書き直したものですが、この部分は大体まとまった原稿に従っていると言われています。執筆はこちらの草稿部分の方が第1篇より先に書かれているのだと思います。僕の見立てでは、先の第三部の方法を示した文章にも個々的には従前の「資本一般」の考え方が表現としてはまだ残っているような気がします。前にもちょっと言いかけましたが、第2篇では総資本を平均的に五分割しただけで、それぞれを代表単数的に没个性的に扱い、独立し市場の競争に参加する個別の資本としては扱っていないように思うのです。そして価値通りの交換をまず設定して、剰余価値の利潤への転化からさらにその利潤を平均利潤として再転化したところで、それぞれの資本に配分され、〈費用価格+平均利潤〉という生産価格の成立が説かれ、商品も生産価格による全面的交換に変化するという話です。後の第10章の「市場価値論」の展開から想像すれば、まず部門内の競争で、剰余価値率の平準化が行われ、続いて部門間競争の結果として平均利潤が形成され、生産価格が成立すると考えているようにすら思えます。もちろん、資本構成の差異や固定資本の更新期間の問題や、あるいは資本の回転率の違いと資本の年利潤率の計算の関係などの条件も細かく説明されますが、それはリカードもすでにやっていたことです。

これらは実は、価値交換という意味が具体的な生産価格交換に転じる gestalten の過程を表わしているのではないかと思うのです。つまり同一平面上での「変化（転化）」ではなくて、内面の論理から具体的な形態への姿態変換とその結果としての具体的な形態の登場の過程の叙述だと思うのです。ただ商品の価値での交換という内面的でしかも疑似的な存在の論理が表面に出てきて、あたかも現実な社会的状況の比較と見誤られると、両者の存在の持つ社会的な背景の相違が論じられなければならないことになり、理論的整合性の確保が難しくなります。「小商品生産社会」などという幻想も論じられたこともあります。今では誰も問題にしないのも当然でしょう。しかし論理的に説明しようとしても、なお価値通りの交換が一般に前提されているのは何故でしょうか。価値こそが人間労働を根拠にする確証となっており、その唯一

の量的尺度であり、それこそが何人にも反論できない労働価値説の正しさを証明するものと解されているからではないでしょうか。でもマルクスは何度も言うように、相対的価値形態に置かれた商品の価値は、等価形態に置かれた等価物、最終的には貨幣の量、つまり価格によって市場で計られる以外にない、とはっきり述べていました。それなのにどうして商品の価値は投下された抽象的人間労働の量によって決まると言ったのでしょうか。

もとは、「労働」、「生産」からその「経済学批判体系」の構想を出発させようと用意していたマルクスが、その考えを明確に放棄したことを示したのは、経済学批判体系の原稿として書き始めた *Grundrisse* (『要綱』) の完成後すぐ後に出版した『経済学批判』(1859) でした。それは *Grundrisse* 執筆と同時期に書かれた前掲の経済学批判体系プランの中の「資本一般」の項に「序説」として追加された「商品・貨幣論」が元になっているものと思われます。マルクスは、ここで事実上、現行『資本論』体系により明瞭に窺われるように、流通形態論の独立・分離の方向に舵を切ったともいえるのです。

それでもマルクスがなお労働価値説にここで拘泥したのは、出発点としての「生産」論へのこだわりがまだ消えていないのか、あるいは古典経済学の伝統への敬意なのか、ほかに意味があるのか、もちろん分かりませんが、古典経済学批判を掲げながら、マルクスはこの段階まではまだリカードに大きく影響されていたことは、経済学のプラン構想を見ても、生産価格の形成の論理の推し進め方で考えても、疑いえないように思うのです。経済学の歴史の伝統の重みと、マルクスが正当にその流れを継承していることが実に鮮やかに理解できるとも言えます。

ところで商品の価値が抽象的人間労働の体化物として、その投下労働の量によって計られるということは、資本主義社会の富がほとんどすべて商品であり、それは人間労働の成果であって、しかもそのために使用される生産手段も、元来は労働の生産物であったことから、それぞれの生産物の生産を辿ってゆけば一定の労働とその支出の量と割合が分かるから、それこそ社会的労働の配分であり、利潤率の平均化を通して、生産価格が成立してもそれは剰余価値の再分配にすぎない以上、「価値から生産価格への転化」は、労働価値説の主張にさほど影響を与えるものではないと考えれば、それはリカードの価値修正論を、丁度裏側から見たことと同じことのような感じがするんです。リカードは、歴史的存在である価値(生産価格)を絶対視して、その完全な成立をいわば邪魔している諸条件を解きほぐし、「真実の価値への還元」に生涯最後の理論的努力をささげて、結局、その修

正は軽微であるとして、「不変の価値尺度」としての労働による価値決定説を信じようとしたのですが、マルクスの方は、反対に、生産価格を歴史的存在と見ながらも、それを社会的労働配分に裏付けられた価値概念の修正にすぎないということに、これまた、理論的営為を尽くしたとも言えるのです。しかもマルクスの場合、総価値＝総生産価格、総剰余価値＝総利潤の命題で示されるように、「価値の生産価格への転化」は商品総体としては変化をもたらすものではなく、個々の相異は全体として相殺されてしまうという話であり、またそこに価値法則の貫徹の根拠を説こうとしたのでした。面白いことに、全体としてここでいわれるプラスとマイナスが相殺されるという考え方も、もともとリカードにあったと思うのです。それは賃金の騰落による価格変動が、資本構成や資本の回転期間の違いによって不均等に生じるという問題を、『原理』の第Ⅲ版に至って、尺度とする金の生産条件を任意に中位に設定することで、プラス・マイナスがそれぞれ相殺され、全体としては不変にすることができる、と主張したことに源泉があるんじゃないかと思っています。それはさらに、本来の価値修正論にも拡大され、リカードの後継者たちによって一層整理されています。多分、マルクスもそのような学史的展開に多かれ少なかれ影響を受けているはずだと思うのです。

ここで最初の問題に戻ってみることにしましょう。そもそも労働価値説は何処に特徴があるとされているのでしょうか。どこにその主張の正当性があると考えられているのでしょうか。『資本論』第一部の冒頭で、マルクスは、二商品を等置して両者から使用価値を捨象すると、抽象的人間労働が残るとして、それを論証にしています。バーム＝バヴェルク以来、そのマルクスのいわゆる「蒸留法」としてそれは批判の対象になっていますが、マルクス経済学者の中でも、宇野先生のように、バーム・バヴェルクの批評を誤りとして切り捨てながらも、そういう誤解が生ずる理由もまた、マルクスの論証方法にあると考えて、その論証の不十分性を明らかにし、その論証を別個、生産過程論に積極的に持ち込もうとする論者もいます。ただマルクスの主張をそのまま承認しようとする論者であっても、労働価値説が労働生産物の生産における人間の社会的性格とその労働の役割を究極的な根拠にしていることは否定できないでしょう。

先にも説明したように、宇野先生が、労働の二重性の問題を「資本の生産過程」固有の問題とするマルクスと違って、それをあらゆる社会形態に通底する問題としてとらえなおし、それを「労働＝生産過程」の問題としてまとめて、労働の二重の役割をそこで規定し、さらに「資

本の生産過程」における労働力商品の使用価値である人間労働支出の普遍的な性格を、そこに確認し、また他方で特殊に労働力商品の消費として資本主義的生産に特徴づけることによって、商品形態を与えられた労働生産物の掘ってたつ価値概念を明らかにすることが出来たといえるのです。

商品の価値概念とはそれが「交換可能性を有するもの」と表現することが出来るとすれば、まさにそれは貨幣で計られる価格を有するものであることを示すこととなります。それが労働価値説として根拠づけられるのは、諸商品が社会的に生産される中での人間の労働と労働との関係、要するに社会的分業関係が前提されていることを意味しており、その価値の量的関係が人間相互の関係性によって内在的に根拠づけられているからにはほかならないからです。しかも、その社会的労働配分の内在的関係性は価値によって示されるのだけれども、その価値は、実は、価格によって、つまり市場の市場価格によって示されるほかにないのですが、その市場価格の運動の過程での偏奇が収斂する水準が生産価格であるとすれば、内的基準である価値の大きさは生産価格という具体的な姿態で現れているということになるのです。資本主義社会での労働配分はこれ以外にはあり得ません。あらゆる社会に共通な社会的労働配分関係を前提とし、具体的には資本主義社会における資本配分による社会的労働配分関係を直接的な根拠にしているということなのです。つまり資本の投下量という形で決まるのです。価値がいわば「逆転」して生産価格として現れる。これが「価値の生産価格への転化」の実態であり、マルクスのいう *Gestaltung* ではなかったのではないのでしょうか。いわゆる「価値から生産価格への転化」があっても、個別の価値と生産価格との乖離が、「総価値＝総生産価格」で相殺されるということはありません。何度も言うようですが、価値という概念と価格概念とはもともと比較不可能な異次元の世界に属する概念なのです。生産価格で表わされる商品の価格こそ資本主義的商品生産社会における内在的な「商品の価値」を具体的に表わしているものなのです。

若きエンゲルスが「国民経済学批判大綱」で示した粗削りではありますが、新鮮な感覚で本質と現象の逆転を市場の資本の競争の中に見出したことを思い出さずにはいられません。そしてまた同時に、マルクスが *Grundrisse* の中で述べていた、「競争は、資本の内在的な諸法則を資本に対し外的な必然性として強制するために、それらの法則を外見上すべてさかさにする。それらを転倒する」(邦訳『要綱』Ⅳ、715頁)という印象的な表現をあらためて記憶の中から引き出してみたくになります。

話は最初の方に戻ることになりますが、僕が「マルクスはリカードを本当に超えることが出来たのか」という形で示そうとしたことは、実にマルクスの生産価格論の展開の中に潜んでいる事態なのであって、マルクスが「価値から生産価格への転化」を価値の部分的修正にすぎない、総量で考えれば同じになる、と考えていたとすれば、リカードの「価値修正論」をまだ完全には超えていなかったと言えるのではないかということだったのです。少なくとも現行の『資本論』第三部を開く限り、その疑念は残ります。ただそれを正当な軌道に正す道筋もまた、マルクス自身の叙述の中にやはり遺されていたのではないかということです。それがうまく展開できていなかったとしても、それはエンゲルスの責任だとは言いきれません。マルクスの草稿は極めて不完全な部分を含んだものであったし、マルクス自身がまだ自らの新しい方法を十分に身に付けて展開しきれていなかったと思われる節があるからです。実際、エンゲルスでさえそのことを十分理解するには至っていませんでした。マルクス＝エンゲルス以後のマルクス経済学者がそこまで問題に気付かなかったとしても無理はないかもしれません。長年の研究の積み重ねを通じてこそ事の本質が次第に明らかにされてきたと考えるからです。

ですから、今ここで僕がしゃべっていることは、もちろん、宇野先生のご意見ではありませんし、先生がそこまで言われている事実もありませんが、それに、前にも言ったように、宇野先生は「如何なる社会にあっても、何らかの生産物をうるには、時によっては、また人によっては異なるにしても、一定量の労働を要するものである」という一般的な原則に基くものであって、いわゆる労働価値説は、これだけでも否定しえないものと考えてよいのである(新『原論』55頁)のだが、「価値の実体を労働と規定し、その法則的展開を論証するということは、それだけでは十分でない」(同上)、という理由で、労働者は自らの労働をもって自ら必要な生活資料を「買い戻す」という論理を使用して、ご自身の生産過程における商品の価値決定の原理の論証を試みられたわけです。しかしそれが個々の商品の価値規定の論証になっているとは考えられないというのが僕の理解であることはすでに述べました。その論証はそもそも必要ではなく、それまでの先生のお考えを延長して辿った結果というべきものが、これまで僕が述べてきたこの説明であると、僭越ながら考えているというわけです。

ただこれは例えば、『資本論』第一部の冒頭で説かれる「価値」を、その第三部で初めて説かれる「生産価格」と読み替えるというようなごく一部に存在する解釈とは

全然意味が違います。それは注意していただきたい点です。『資本論』で言えば、第一部および第二部に対する第三部の位置づけを、内的本質に対する具体的な現象形態への変貌過程とその現実的姿態を論じる異次元の経済現象の論理的叙述とみているのがわれわれです。それはまた、マルクスが『資本論』第三部の冒頭で論じている第三部に課した役割に応じた方法に従うものと僕は理解していますし、マルクスにとっても矛盾ないものはずです。

もちろん宇野先生にお話しできたとしても、すぐにはご納得いただけなかったと思います。これは考えてみれば、この話の初めに関連して話題にしたランゲさんの本に示された内容と全く真逆の結論と言ってもいいでしょう。彼女が激しく批判を加えた宇野先生の『経済原論』よりもっと悪質で非マルクスの理解だと言われることでしょう。

ただ思い出していただきたいのは、先に引用したように、マルクスはあの *Grundrisse* の中ですでにこうしていたのですよ。——「競争によって個別的資本は、現実にはじめて総体としての資本の諸条件のなかにおかれるのであって、このばあい当初の法則はまるでくつがえされたかのような仮象を呈する。資本それ自体の運動によって規定されたものとしての必要労働時間は、だがこのようにしてはじめて措定された。これが競争の基本法則である。需要、供給、価格（生産費用）は、それに続く形態諸規定である。市場価格としての価格、または一般的価格。次には一般的利潤率の措定。市場価格の作用の結果として、そのさい諸資本は種々の部門に配分される。生産費用の引下げ、等。要するにここでは一切の諸規定が資本一般のばあいとは反対のかたちで現れる。さきのばあいには価格は労働によって規定されたが、ここでは労働が価格によって規定される、等々。個別諸資本の相互的行動は、ちょうどそれらが資本としてふるまわなければならないようになしおわせる。個別者の外見的には独立した行動とそれらの無規則な衝突が、まさにそれらの一般的法則の措定である」（『要綱』Ⅲ、606頁）と。——僕自身は実は、このマルクスのやや先走った表現に感心してしまうのです。

そして同時に、先に述べたように、いわば大胆に解釈することによって、今まではっきりしなかった問題も解決される見通しをもてるのではないかとすら考えているのです。つまり、生産的労働、不生産的労働の区分の問題であるとか、「流通費」なる概念が、価値を生む労働と価値を生まない労働との関連で論じられていますが、それがいったい何を基準に論じているものなのか実はよく分からないという疑問も、解決の道を得られるのでは

ないかということです。残念ながら、詳しくここでそれ以上論じる余裕がありませんが、問題は「資本主義的な価値」（生産価格）を規定する労働配分と一般的とされるマルクスの「労働過程」論で規定される「本来の」価値基準としての労働配分との違いの話になっていると考えるからでしょう。これまた論争の種になることは間違いないでしょうね。話が長くなると困るのでこのくらいにしておきます。

ところで、僕は、この話の中で自分の修士論文のことを少しお話ししましたが、当時から僕は、「価値論なき価格論」という揶揄や批判を宇野グループ内からさえも受けていたことは今も記憶しています。今よりはるかに慎重だったし、自分の理解も今ほど進んではいない段階でした。でも、もちろん僕がそれを肯定したことはありません。僕自身はそれでも立派な労働価値説になると考えていたからです。ただそれでもマルクス経済学の研究者を標榜しながら「マルクス経済学」ではないと言われることは誤解だとしても当時は致命的でしたから、口をつむぐことはありました。とはいえマルクス経済学者ではないけれども、僕の意図をほぼ正確に理解して支持してくれた人もいました。ただ僕がその論点を更に押し進めるように期待されていたのに、徹底しなかったことに失望されたようですね。でもそういうところに、マルクス経済学と、現在一般に経済学と呼ばれているものとの間の懸隔が、なお誤解されたまま残されていることも事実なんです。

時間も大分予定より超過してきているので、そろそろ話をおしまいにしなければなりません。最後に、もう一度ランゲさんの本に戻って、この長すぎた報告を終わりたいと思います。

## 第八章 『資本論』あるいは「経済原論」のもつ役割

ランゲさんの宇野批判を考えてみれば、商品価値論や労働価値説のあたりだけとってみても、僕が話したことは、本当にランゲさんが批判していることばかりで、しかも宇野先生よりずっと過激で悪質だということになりそうです。

簡単にそれらをみてみましょう。ランゲさんは宇野『経済原論』が流通形態論を独立させてマルクスが冒頭の価値論で行った労働や生産の問題を排除したことを激しく批判しています。今日のお話の中で、マルクスの *Grundrisse* に示されていたような「資本一般」のロジックが当初「労働」や「生産」から出発していたのに対して、「商品・貨幣」論が途中で「序章」として冒頭に付け加えられ、全体の構成プランが明らかに変わり、その

意図の変化が想像できるようになったことを思い出していただきたいと思います。

現行『資本論』では、さらに第一部の第2篇に「貨幣の資本への転化」という話題が入ってきて、次の第3篇の「労働過程と価値増殖過程」への導入の規定の問題につながっていくことになります。これは『資本論』刊行以前の「23冊ノート」の中に登場してくる内容です。が、そこでも、なお価値の実体としての労働の問題が先行しています。なぜそこでもそういう指摘が必要なのでしょうか。労働力商品はそこで初めて登場するわけですし、剰余価値生産の秘密もそこで概略明らかになってくるのですが、その前にすでにその問題が、労働価値説の問題が、つまりそれぞれの商品（生産物）の生産に投ぜられた抽象的人間労働の総量による価値決定が、 $G-W-G'$ を否定し、産業資本の成立を説く根拠として前提されてきているのです。しかもそれは商品の「使用価値の捨象」という方法ですで行われているのです。

ただそこにマルクス経済学の特徴を見る論者もいます。その分析の中に資本主義社会における資本と労働との階級関係が見通せるからだという考えもあるわけなのです。ランゲさんも「商品には、資本と労働との関係がたとえどのように『隠されて』いるにせよ、すでに含まれている」と述べています。宇野『原論』がそこを無視しているのがランゲさんのお気に召さない理由の一つなのです。

ランゲさんの論じている問題は多岐にわたっているのですが、今日の僕の話と関係するものには、もう一つ「商品の物神性」の問題がありました。ただこのことについて詳しく議論すると、今日お話しした主題がボケてしまうので、主題に関連する限りで、ごく簡単にだけ触れておきましょう。

ランゲさんはマルクスが『資本論』第一部、第1篇、第1章「商品」、第4節「商品の物神的性格とその秘密」を自著の表題としても扱っているわけですが、それは商品の特徴を説明するものとしてはいわば当然でしょう。その指摘は商品経済が人間と人間の間をモノとモノとの関係として、しかもそれは価値関係として人間に支配的に作用するものであることを明らかにしたものです。でもそのいわゆる物象化の問題自体を僕はここで云々するつもりはありません。皆さんにとっても分かりすぎるほど分かっている問題だからです。そしてまた商品の物神的性格がより一層顕著に貨幣物神として現れ、さらにそれは資本物神として、商品経済の発展に伴う形態の展開に即して開示されます。それは、資本主義社会という歴史的にも特有な社会を構成する特殊な構造が形成されるということにこそ経済の理論が形成されうる最大の根

拠があるからなのです。そしてランゲさんの宇野批判に対してはむしろこの機会に、その資本主義経済の物神的性格をここで強調しておきたいと思うのです。

それはどういうことなのでしょう。僕はそれが経済学として社会科学というものの成立を初めてもたらしたという重要な意義があると考えたいということであり、『資本論』がいわばその基準を初めて作り上げるものであったということなのです。資本主義的商品経済社会は資本という人間が疎外され人間に対立した自立的な組織をつくりだし、その存在によって人間が客観的に法則的に支配されているという状況が生みだされます。ですが、この状況こそが、人間から客観的に分離され対立した自然現象を対象とした物理学のように、人間にとって外的に客観的な研究対象としてとらえ得る一つの科学（社会科学）の成立を初めて見通したものとしたのであり、事実、『資本論』はその試みを、長らく古典経済学において science として追及されてきた経済学を相手に、その理論史の中でも初めて、方法的に意識的に、労働・生産過程を純粋資本主義社会の想定に重ね合わせることによって、理論化を試みた最初の例ではなかったかということです。もちろん対象が個々の経済合理性に従った人間の行動によって全体として形成される社会構造であるとはいえ、客観的に自然現象のように人間に対立した対象として、存在の自律性を主張しているのです。だから科学の対象になりうるわけですが、問題なのは対象とするその構造物が人間から全く客観的に独立している自然の諸要因の組み合わせからなる構造体ではなくて、人間の個々の経済合理的な社会的な営みを通じて構成される構造体であるということです。そこに経済学という特殊な科学としての特徴があり、その多様性と不安定性の理由があるのではないかと思います。誰でも実験によって確かめられるはずの物理学とは違った不安定な要因を含まざるを得ない由来と勝手な人間の主観的で恣意的な思い込みがそこに加わってくるのです。数理経済学において公理主義的な数学利用が特に問題視されるのも、数学自体に責任はないものの、原因はやはりそこにあるように思えてなりません。

しかしその純粋に経済的範疇の展開として組み立てられている構造は、当然、論理的に一貫したものとして作られていなければなりません。その対象とする資本主義社会は歴史的な存在であって、実験によってその動きを再現することはもちろんできません。ただその動きは論理的なシステムとして把握し、論理的にその諸範疇の存在妥当性を吟味し、その展開の合理性を検証していく以外にはありません。もちろん歴史的といっても資本主義的商品経済社会として歴史的に存在していることを指し



ているだけで、その理論が歴史的変化に対応していると言っているわけではありません。その理論は商品経済のシステムとして自律的に存在し、その社会の中で生じる不安定要因を克服しながら、原則的には繰り返し安定的に機能しているはずですが、もちろん、商品経済の成熟のいかんによって、そのシステムが広く社会的に十分に機能していない場合もあります。

ただ、例えば、皆さんご存じだと思いますが、江戸時代の大坂（大阪）で栄えた堂島のコメ市場のことを考えてみると、もちろん日本は資本主義ではなかったとしても、商品経済は非常に発達していて、各藩は、といっても全部ではありませんが、堂島の市場を利用していたようです。また地方にも小規模のコメ市場はあったようですが、堂島を通したコメの方が見栄えがいいとされていたようです。もちろん各市場の価格差を利用して儲ける者もいたようですね。堂島の市場ではコメの現物の売買でなくでなく手形で業者と売買しています。大名は蔵に在庫の年貢米を商人に落札させ、その代金の3分の1を銀貨で受け取り残りは手形で受け取るというわけですね。その手形の期日がくればコメを渡すという話でしたが、その期日は延ばすことができる。手形も第三者に転売される。そしてその手形が大いに流通するわけです。コメの現物がなくとも手形を発行してもらって藩の金策に利用したりすることもあったようです。コメ市場がやがて活発な金融市場と化し、コメ手形は「コメ切手」と呼ばれるようになると、その役割はさらに進化するわけです。コメの現物と関係なしに手形だけが取引されるようになってくるわけで、そうなればさらに手形や貴金属の保管の問題も出てくるし、やがて「帳合米商い」という先物取引が生まれてきます。世界最初の先物取引だと言われることもある話ですが、ともかく清算のための金融機関も誕生し、取引の情報を伝える業務も出てくる。情報伝達の方法もどんどん進歩してくるというわけで、もうこれ以上、ここでそんなことをお話ししてもしょうがないのですが、商品経済の展開というのはこのように勝手にどんどん進んでいくのですね。ヨーロッパなどでもそうですね。商品経済の発展に伴って、大体行くところまで行ってしまおうと考えた方がよい。あとは労働力の商品化の登場ということで、資本主義的商品経済ということになるだけの話でしょう。

もちろん、資本主義の初期には株式資本の形態や株式会社・有限会社は存在しましたが、投機的な目的以外には十分に利用されることはありませんでした。金融市場にしても、株式会社の発展にしても、それが十分生かされるようになったのは、資本主義の発達に伴って金融業務が多忙になり、また企業が巨大化して株式会社の役割が

増大したからです。商品経済に関するさまざまな形態規定、というよりむしろ、金融や株式資本の持つ機能が膨張し、広く生かされる部分が拡大したということなのです。実際、資本主義社会が成熟すれば、純粋資本主義社会という想定をそこに設定することによって、理論的には、そのシステムの機能は容易に十全に発揮された場で理解することも容易になり、原理的理論の完成は近づくことになるでしょう。

理論化というのはそういうことだし、マルクスが自らの『資本論』を純粋資本主義を想定することで理論化していることは周知のとおりです。株式会社の果たす役割が大きくなって、新しい組み合わせや新しい解釈によって、原理的に新しく追加する範疇はもはや存在しないはずですが、経済学の「原理」という考えはリカードやJ.S. ミルなど古典経済学の段階ですでに演繹的な体系の目標になっていたわけだし、マルクスがはっきりと意識的に『資本論』においてその成立を求めたものでした。（イデオロギーの問題もありますが、ここでは理論の話だけで十分です。）また現代に日本で発行されている「経済原論」の類いの書物も、同じような想定の下で資本主義の「原理」の理論化が目標にされていることは言うまでもないでしょう。「我々だけの原論」などというものが存在するはずはありません。資本主義経済の「原理」たる所以は、経済学の理論的諸命題とそのシステムの展開が、資本主義的商品経済を通じて一貫してほとんど変わらないものとみるからです。ただ経済の内容をなす歴史的な実体関係の変動を通じて経済的諸範疇の組み合わせや関係が変化してゆくことはあるでしょうし、新しい組み合わせで事態の変化に対応することもあるでしょう。場合によっては事態に適した新しい経済的範疇や組織の登場もないとは言えないでしょう。ただ基本的には商品経済の発展によってすでに必要な範疇や諸形態は準備されているものと理解されるし、それらの組み合わせられた体系が資本主義的商品経済の原理体系であるということになると理解されます。そしてその体系の絶えざる理論的完成のためのたえざる努力が後学の研究者に必要とされることは、あらゆる科学に共通に求められる内在的で本質的な性格であるというしかありません。

「商品の物神的性格」についてランゲさんに疑問を出すとしたら、とりあえず『資本論』の持つ本来的な役割こそが資本主義商品経済の「物神的性格」を如実に表現するものではなかったか、ということになるでしょう。

というわけで、今日のお話も、いつものように雑然としたまま、不十分な形で終わることになりました。

なお、レジュメでは、最後に現在発行されている諸「経済原論」の幾つかの点について、方法上の疑問点を掲げ

ておきましたが、『資本論』第三部にみられたマルクスの新しい構想にしたがって、「原論」の構成も一段と見直されることになれば、疑問もさらに出てくると思います。それだけでなく、ある意味では、この「総過程論」の構想の下では、資本の本質的規定がいわば資本家の認識できるいわば逆転した様相に変貌して現われ機能することになるわけですから、それこそ現代、世界で一般に経済学と呼ばれているものと、いわば初めて同じ土俵で議論できることになると言えないこともありません。資本の本質を理解した上で現実の経済の姿態とその動きを労働力の商品化を基礎に据えて冷静に認識できることの強みは、一層の迫力をもって現実の経済の分析に役立つくれるかもしれません。ですが、今日のところは、議論はすべてここまでにして、報告は終わらせていただくことにします。長時間有難うございました。(了)

【追記】この報告は、2022年8月11日にzoom形式で行われた私の長年主催する研究会〔Uno Riron Initiative (URI) 櫻井研究会〕での当日の録音の速記録を基にしている。ただこの性格上、繰り返しや曖昧な表現も多いので、編集整理し、全般に大幅な削除と組み替え、さらに質問で混乱した最後の部分では、話しのできなかった箇所など、かなりの加筆をおこなった。ただし全体として内容そのものには変更はない。

また、長時間にわたって私の報告を聞いていただいた研究会の出席者の皆さんに感謝するとともに、この機会に、長年にわたって研究会の運営に多大のご協力いただいたことにお礼を申し述べたい。

なお編集作業の過程で、何度か書き直した原稿を詳細に検討され、内容、表現、誤植の訂正などに繰り返し多くの助言を賜った弘前大学名誉教授鈴木和雄氏に感謝を捧げたい。また、武蔵大学の私の元ゼミの学生で、今回の研究会にも参加した佐々木勝年、国分早苗両君に頂いた助言と助力にもお礼を申し添えるものである。(2022年11月30日、記す)